



NEWS LETTER

March 2024 Number 14

ご挨拶

演劇映像学連携研究拠点代表 児玉 竜一

演劇博物館が運営する演劇映像学連携研究拠点は、2009年度より文部科学省から認定を受けた共同利用・共同研究拠点として活動を発展させてきました。本拠点の特色は、100万点を超える資料を収蔵する演劇博物館が母体であることを活かし、演劇博物館の収蔵資料のうち十分な学術利用がなされていない貴重な未公開資料・非公開資料を共同研究に供することにあります。

本拠点は具体的に、4種の共同研究事業を通じて、演劇・映像分野以外も含めた多彩な研究者による多角的かつ先進的な研究活動を推進しています。まず、「テーマ研究」は本拠点が提案した資料とテーマに関する共同研究事業です。「公募研究」は演劇博物館の非公開・未発表資料を対象とする共同研究課題を公募して実施しています。「奨励研究」は演劇博物館所属の若手研究者が中心となり、将来の共同研究の基礎となる資料調査を行っています。そして「主催事業」は本拠点主導により、国内外の研究機関や民間企業と連携して行う共同研究事業です。

「テーマ研究」と「公募研究」では今年度、8件の共同研究チームが昨年度からの活動を継続して行いました。各チームの成果は、成果報告冊子の刊行、公開研究会の実施、対象資料のデータベース公開作業等を通じて広く国内外に広く発信されました。

「奨励研究」では今年度新たに6件の研究課題が採択されました。歌舞伎の「解説」の歴史と変遷、落語・講談関連資料の調査・研究、日英の女性劇作家・劇評家たち、

太田省吾、大和屋竺、撮影所システム衰退期におけるプログラム・ピクチャーといった様々なテーマ・角度から演劇博物館の所蔵資料の調査・考証が進められました。

そして「主催事業」は、①コロナ禍を経た舞台芸術のあり方の検討、②国内外の民間企業や研究機関との緊密な連携、③デジタル資源と技術の活用可能性の開拓の3つを柱として展開されました。

①の関連事業としては、7月に「コロナ禍の3年間——演劇・ミュージアム・社会」と題したシンポジウムを開催し、国内外の演劇を中心とする芸術と社会について、演劇の「ミュージアム」という立場からパンデミックの3年間の総括を試みました。②についてはまず、TOPPAN株式会社と2016年から進めているくずし字判読支援事業を継続しています。これまでに構築してきた「くずし字OCR」を教育目的に活かすとともに、過年度に作成した字形データセットを修正・統合して利便性の向上を図りました。また、共同利用・共同研究拠点間の連携事業として京都芸術大学舞台芸術研究センター「舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点」と共同で特別展「太田省吾——生成する言葉と沈黙」の関連イベントを複数開催し、好評を得ました。さらに、バーミンガム大学やストラスブル大学との連携事業も実施し、国際的な研究交流を推進しています。③に関してはデジタル化した資料のデータベース公開を積極的に進め、貴重な資料の保全と共有に努めています。

本拠点はこれからも演劇博物館が所蔵する豊かな研究資源とデジタル技術を活用し、当該分野の研究を牽引するハブとして活動してまいります。なお、2023年4月より、本研究拠点の母体である早稲田大学演劇博物館の館長が、8代目の岡室美奈子から、9代目の児玉竜一へと変わりました。それに伴い、拠点代表も児玉となりました。今後とも皆様のご支援とご協力を賜りますよう、心からお願い申し上げます。



演劇博物館特別展「太田省吾——生成する言葉と沈黙」
Flyer of the exhibition, Emerging Words and Silence: Ōta Shōgo and His Process of Creation

contents

■拠点代表あいさつ	1 p
■令和5(2023)年度 テーマ研究成果報告	2 p
■令和5(2023)年度 公募研究成果報告	5 p
■令和5(2023)年度 奨励研究・拠点関連事業成果報告	10 p
■令和5(2023)年度 拠点主催事業成果報告	12 p
■Mission and Vision	15 p
■Report on Principal research, fiscal 2023	16 p
■Report on Selected research, fiscal 2023	19 p
■Encouragement Research Project/ Collaborative Projects	24 p
■Project Organized by the Center	26 p

テーマ研究

1

別役実草稿研究

研究代表者：梅山いつき（近畿大学文芸学部准教授）

研究分担者：岡室美奈子（早稲田大学文学学術院教授）、宮本啓子（白百合女子大学非常勤講師）

【研究目的】

本研究は、別役実家から寄贈された資料および、演劇博物館が所蔵している別役作品に関連する資料の調査を通して、別役の劇文体、及び劇作品における人物表象について検証するものである。2020年度に採択された同名のテーマ研究では、初期作品に関わる資料を調査し、2022年度以降の研究では1970年代以降の作風の変遷を整理すると共に、宮沢賢治や深沢七郎などの文芸作品や童謡、古歌への関心がどのように創作に反映されていたのかも明らかにすべく、調査を進めてきた。

2023年度は前年までの調査を引き続き行うと共に、別役が脚本を担当した放送作品を取り上げ、作品分析を行うべく、本研究では寄贈資料に含まれていた台本等の関連資料を調べた。別役がどういった放送作品を世に送り出し、演劇作品とはどのような関連性があるかを考察した。

【研究成果の概要】

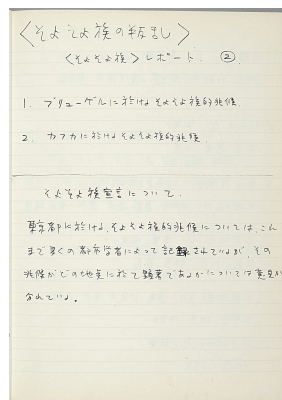
まず、継続調査として未整理資料の調査および、文芸作品や童謡、民謡などの唄が70年代以降の作品に与えた影響について検証した。一点目の未整理資料の調査は、宮本啓子を中心となって、バラバラの状態に寄贈された戯曲『マクシミリアン博士の微笑』の手稿等を整理した。

二点目については岡室美奈子が戯曲『あーぶくたった、にいたった』（以降『あーぶくたった』）における深沢七郎の小説『楢山節考』の影響を論文としてまとめ、『演劇研究』に投稿した。本論文は『楢山節考』が別役に与えた影響を、「貧困」「餓死」「雪」をキーワードとして『あーぶくたった』の中に探ることを目的とするものである。別役は、戯曲『そよそ族の叛乱』において、餓死することで社会に対してささやき続ける「そよそ族」という沈黙の民を構想した。岡室は、その思想が後に発表される『あーぶくたった』に結実していくことを指摘し、その過程に『楢山節考』からの少なからぬ影響が認められることを明らかにした。それは、『楢山節考』において、山に捨てられる「おりん」という登場人物を通して描

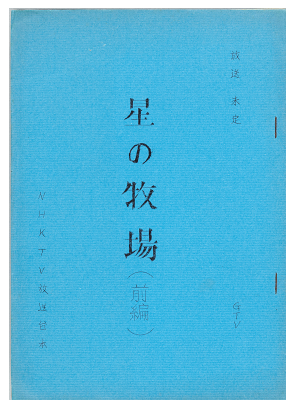
かれる、貧困の村で自らの死を積極的に受け入れ、雪と沈黙に閉ざされていく姿と歌の力である。本論文は、『楢山節考』を介して、一見、断絶しているように見える、70年代の抽象的な戯曲と後半の小市民ものと呼ばれる一連の作品の間に連続性を見出し、そこには社会によって作られながら社会によって隠蔽される「貧困」へのまなざしが一貫して注がれていることを指摘した。

放送作品研究としては、テレビドラマ『星の牧場』（NHK総合、1981年）と映画『戒厳令』（監督・吉田喜重、1973年）を取り上げ、映像とシナリオとの比較を行った。『星の牧場』は庄野英二の同名の小説を原作とするが、脚本化するにあたって、別役が戦争および終戦後の社会に焦点を当てていることがわかり、演劇作品にみられる特徴との連続性が明らかになった。さらに、別役の独特な台詞は、演劇と映像メディアにおけるリアリズムの差異を際立たせることを発見し、今後、別役の放送脚本をメディア論的に分析していく際の重要な視座を得た。『戒厳令』については、主人公の北一輝に関する資料が寄贈資料の中にあるため、今後、そうした関連資料とも照らし合わせて、作品分析を進めたい。

以上のように、本研究では別役関連の寄贈資料を活用し、別役研究に新たな知見をもたらすことができた。本成果を今後の研究に活かしていく所存である。



〈そよそ族〉レポート②
（ノート『備忘録』に記載）
[64362_026]
Report (2) on The Soyosoyozoku
Tribe (written in "Memo"
notebook)



『星の牧場 (前編)』台本
[タ06-05962-001_001]
Script for Star Ranch Part I

テーマ研究 2

倉林誠一郎旧蔵資料の調査研究

研究代表者：後藤隆基（立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター助教）

研究分担者：神山彰（明治大学名誉教授）、米屋尚子（文化政策・芸術運営アドバイザー）

【研究目的】

敗戦直後の1946年に俳優座に入団した倉林誠一郎（1912-2000）は、56年に俳優座劇場を設立し、81年に代表取締役役に就任した。また、65年には日本初の芸能実演家の統一団体である日本芸能実演家団体協議会（芸団協）の設立に参画し、舞台芸術における実演家の権利保護や文化活動の支援、政策提言等に多大な影響を及ぼした。本研究では、従来未整理・未公開であった倉林の旧蔵資料の調査・考証を通して、演劇制作者としての倉林の再評価を行い、戦後演劇の基礎的研究のための基盤形成を図る。

【研究成果の概要】

本年度は、前年度に引き続き、膨大な資料群の収められている段ボール箱を一箱ずつ開梱し、中身の確認・整理・調査等の作業を進めた。具体的な調査のために、藤谷桂子、佐久間慧（以上、研究協力者）の助力を得て、資料の性質ごとに整理と分類、登録を進め、目録作成作業を継続した。

改めて、倉林誠一郎旧蔵資料の概要を確認しておくと、倉林のご遺族から芸団協に預けられた資料の総点数は6,523点であった（演劇博物館に寄贈される前の調査段階）。そのうち、重複等による非受入資料（図書および雑誌3,519点）を除く3,004点を演劇博物館で受け入れた（図書：387点／雑誌：835点／博物資料：1,782点）。その内容を大まかに分類してみる。

①日記、②自筆メモ・日誌・ノート、③書簡類、④俳優座・俳優座劇場関係資料、⑤各種演劇関連団体関係資料（書類・冊子等）、⑥舞台写真（ネガフィルム等を含む）、⑦スクラップブック、⑧公演プログラム、チケット、⑨チラシ、ポスター等、⑩新聞雑誌の切り抜き、⑪図書・雑誌、⑫各種資料の複写物等々。

前年度以来、これら多岐にわたる未整理資料を、順次確認しながら、倉林がとくに関心を寄せていたテーマ——入場税、文化政策、労演、興行史等——について、

具体的に考証が可能と思われる資料の抽出作業を進めた。しかしながら、膨大な資料群の選別作業は困難であり、個別具体的な考証を継続しつつ、目録の整備等の基礎的作業を中心におこなった。

それをふまえて、本年度は、本プロジェクト研究代表者が2021年度から実施してきた科学研究費補助金基盤研究(C)「倉林誠一郎資料の調査・考証に基づく戦後新劇の基礎的研究」(研究代表者・後藤隆基 課題番号21K00199)と連動する形で、倉林旧蔵資料のうち、1947年6月から2000年3月まで書き継がれた日記(全79冊。なお、本プロジェクトは日記以外の資料を対象に整理・調査を進めている)に関わる資料を選定し、整理・調査を試みることにした。

とくに、占領期に書かれた日記(1947～1952)の翻刻作業をおこなっていたため、同時期の日記の記述を補完しうる資料の選定をおこなうとともに、上記の科研費事業との共催シンポジウム「占領下新劇裏表——倉林誠一郎日記を読む」(2024年2月10日／於：立教大学)を開催した。神山彰(明治大学名誉教授、本プロジェクト研究分担者)、児玉竜一(早稲田大学演劇博物館館長、本プロジェクト研究協力者)、後藤が登壇。倉林日記を視座に、同時代の映画等も射程に入れながら、興行としての戦後新劇の様相や経済的側面に肉迫し、従来の新劇(史)観を再考するための問題提起の場とした。

以下、今後の展望について述べる。前述した科研費事業が本年度で最終年度を迎えることから、次年度以降、日記も含めた倉林旧蔵資料全体を対象とするテーマ研究として体制を再構築し、倉林誠一郎という総体を明らかにするとともに、その位置づけや戦後新劇の動態について講究していく予定である。なお、前年度に整理、考証に着手した訪中新劇公演関係資料、瑞穂劇団日誌に関して、今年度は詳細な調査・考証を進めることができなかったため、次年度以降の検討課題とし、他の資料の発掘と調査もふまえて、研究を遂行していく計画である。

「映画館チラシ」を中心とした映画関連資料の活用に向けた調査研究

研究代表者：岡田秀則（国立映画アーカイブ主任研究員）

研究分担者：紙屋牧子（武蔵野美術大学非常勤講師）、柴田康太郎（日本学術振興会特別研究員 PD）

【研究目的】

本研究は、2020-2021年度の公募研究における東京都部の映画館に関する調査研究を、継続・発展させるプロジェクトとして開始された。2022年度からは新たに東京と関西の映画館チラシを考察対象に加え、東西の映画興行に関する比較研究も視野に、無声期映画興行の実態を明らかにし、それらを正しく映画史に記述していくことを目的とする。

【研究成果の概要】

本年度は、2022年度より開始した映画館チラシ（東京93点／大阪137点）の目録化を継続的におこないつつ、関連資料も含めた考証作業を重点的に進めた。また、先行する2020-2021年度の公募研究との関連性のあるテーマを各自が設定したうえで、調査・検討をおこなった。その成果公開として、柴田康太郎は奈良尾花劇場関連資料に着目して口頭発表「地方都市における映画館経営と映画興行——大正期の尾花劇場関連資料を中心に」（日本映像学会第49回大会／2023年6月11日／於：明治学院大学）をおこなった。また、紙屋牧子は映画館チラシと現存フィルムとの分析から着想を得た研究として、論文「明治末期から大正初期の大衆文化におけるサディズム／マゾヒズムの間テクスト的考察——『五郎正宗孝子伝』（1915年）を起点として」（『映像学』第110号、日本映像学会、2023年7月）を発表した。岡田秀則は、「全国映画資料アーカイブサミット2024」（2024年1月26日、オンライン）の企画作りに参画し、国立映画アーカイブにおける映画関連資料の保存・公開事業の取り組みに関する発表もおこなった。

2023年12月11日には、小野記念講堂にて当チームの数年間の活動の成果を活かした映画上映とシンポジウム「甦る、琵琶映画の響き」(2023年度日本音楽学会音楽関連イベント開催助成)を開催した。イベントは、少くない数の映画館チラシにその実践が窺える映画琵琶の実践に光をあてながら、大正期の無声期映画興行において宗教・映画・音楽がどのような実践を織りなしていたのかを検討した。第1部のシンポジウムではまず、映画史の立場から、紙屋の口頭発表「映画『日蓮上人 龍乃口法難』(1920年)を考察する——聖地巡礼と〈奇跡〉の表象」と上田学氏(神戸学院大学)の口頭

発表「日蓮主義宣伝映画と立正活映」で、1920年代における宗教と映画の関係を検討した。次いで、音楽学の見地より、薦田治子氏（武蔵野音楽大学）の口頭発表「大正期の琵琶文化」、および柴田の口頭発表「琵琶映画台本と映画琵琶団体」で、大正期における琵琶楽の潮流、映画興行との交差を考察した。

第2部には、小松弘氏（早稲田大学）所蔵の映画琵琶台本を活用して、『日蓮上人 龍乃口法難』（1920年、国立映画アーカイブ所蔵）を、薩摩琵琶（川嶋信子氏）、映画説明（片岡一郎氏）、邦楽（堅田喜三代氏）とともに「復元」上映する試みをおこなった。上映後は、演者の川嶋氏・片岡氏・堅田氏を囲んだトークにより、琵琶入りの「再現」上映の可能性や課題を議論した。



上映とシンポジウム「甦る、琵琶映画の響き」チラシ
Flyer from the “Reviving the Sounds of *Biwa* Film”
screening and symposium



上映とシンポジウム「甦る、琵琶映画の響き」(於:小野記念講堂)
上映後のトークのようす

Post-screening discussion at the “Reviving the Sounds
of *Biwa* Film” screening and symposium
(Ono Auditorium, Waseda University)

公募研究

1

江口博旧蔵資料にみる戦時下から戦後の舞踊

研究代表者：宮川麻理子（立教大学現代心理学部映像身体学科助教）

研究分担者：北原まり子（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）、マエヴァ・ラモリエール（パリ第8大学博士課程）

【研究目的】

本研究は、「江口博旧蔵資料」（舞踊関係の写真・新聞記事スクラップを中心とする280点）を調査し、政治的変動が著しい昭和期を通じた日本の舞踊界の姿を描き出すことを目的とする。江口博（1903-1982）は、戦前から戦後にかけて半世紀にわたり舞踊批評を執筆し続けた。本資料の調査は、これまで著名な舞踊家を中心に描かれてきた日本の20世紀舞踊史に新たな視点を投じる契機となることが期待される。

【研究成果の概要】

江口博は、新聞社勤務の舞踊批評家として継続的・網羅的に舞踊を観、筆をふるい、その守備範囲は「洋舞」から「邦舞」まで多岐に渡ったが、戦後日本の舞踊界の新たな潮流、とりわけ暗黒舞踏の台頭やポストモダンダンスの影響を受けた若い世代の舞踊家たちの活動についての痕跡は、「江口博旧蔵資料」から顧みることが困難であった。この点を補うため、本年度は8月25日に、1960年代にモダンダンスの制作としてご活躍された中村智子氏をお招きし、非公開での研究会を開催した。中村氏は、厚木凡人、若松美黄、笠井釦らの公演をプロデュースしたほか、60年代後半に3回のDANCE EXHIBITIONを企画している。1964年の「5人の振り付け家による『厚木凡人ダンスリサイタル』」では、高橋彪、若松美黄、横井茂、由良一夫に加えて土方巽が振付を行っており、暗黒舞踏黎明期の活動やダンサー同士の交流について知ることができた。なおこの研究会の開催にあたっては、慶應義塾大学アート・センター土方巽アーカイヴの森下隆氏よりお力添えをいただいた。

また、2年目である本年は、11月22日にフランスの国立舞踊センター（Centre national de la danse）にて、学術研究会「江口博旧蔵資料から見る昭和日本のモダンダンス（Journée d'études « À la recherche de la danse moderne au Japon : Scènes de danse de l'ère Shōwa (1926-1989) »）」を開催した。これは戦時下～戦後の舞踊家の活動について研究が盛んなフランスと

日本との違いを比較するためであり、またこれまでフランスにおいて石井漠や江口隆哉・宮操子などのモダンダンスのパイオニア、もしくは戦後の暗黒舞踏に偏ってきた歴史理解を拓くためである。

この学術研究会では、日本側から宮川麻理子、北原まり子、研究協力者の平居香子が参加して研究発表を行い、フランス側からはマエヴァ・ラモリエール、パリ第8大学のイザベル・ロネ教授、シルヴィア・ヌ・パジェス准教授がディスカッサントとして参加した。まず北原が江口博旧蔵資料の紹介を行い、続けて日本における「洋舞」の始まりから確立期についての研究成果（「« Ce monde de la danse chaotique sans ordre, sans organisation » sous les yeux du critique dans les années 1930」）を発表した。続いて宮川が第二次大戦期の舞踊界について（「Regards sur les danses au Japon pendant la Seconde Guerre mondiale : de la collection d'Eguchi Hiroshi」）、平居が1960～70年代の実験的な活動について（「La revue de critique de danse : Nijusseiki Buyô et le développement de ses activités」）それぞれ研究発表を行った。30名近い参加者が集まり、日仏の舞踊界、とりわけモダンダンスの受容を巡って活発な意見交換が行われた。

なお、2年間の研究成果であるこの学術研究会の発表内容は、冊子『江口博旧蔵資料から見る昭和日本のモダンダンス』にまとめ、研究会参加者および各地の図書館や関連施設に配布した。



CNDでの学術研究会の様子（撮影：Ikumi Togawa）
Symposium at CND (photograph by Ikumi Togawa)

日記から考える歌舞伎役者を中心にした江戸中期の文芸園研究

研究代表者：ビュールク・トーヴェ（埼玉大学人文社会科学部研究科教授）

研究分担者：稲葉有祐（和光大学表現学部准教授）、日置貴之（明治大学情報コミュニケーション学部准教授）

【研究目的】

本研究の目的は「二代目市川團十郎栢庭日記」をもとに、①「栢庭日記」の所縁や信憑性について検討すること、②江戸中期の歌舞伎役者を中心として文芸園のあり方を明らかにすることである。『栢庭日記』は、日記本『柿表紙』とともに、狂歌師鹿都部真顔の主治医とその息子が写したもので、江戸中期の歌舞伎役者の生活、また彼らをまつわる文芸園について記されている重要な資料である（二代目團十郎の日記原本は文化初期に焼失している）。

本研究は、この日記本を出発点として、享保期の歌舞伎役者を取り巻く環境を明らかにし、歌舞伎役者や俳人・文人の関係を明らかにするものである。

【研究成果の概要】

本年度は、第一に日記本の注釈と解説の継続、第二に日記本に登場する歌舞伎役者と俳人の関係を具体的に示す東京大学総合図書館酒竹文庫所蔵『貞佐点俳諧帖』『指南車の』百韻のうち、発句から25句目までの註解および同百韻の作者に関する調査、第三に広く江戸歌舞伎と俳諧の連関と越境の可能性を探るシンポジウムの開催という、主に3点の研究成果が挙げられる。

二代目市川團十郎の日記詳解は研究代表者ビュールクが引き続き行い、その第6回は『埼玉大学紀要 教養学部』第59巻第1号、第7回は『埼玉大学紀要 教養学部』第59巻第2号に発表した。日記に記された時期は享保19（1734）年5月19日～29日と6月1日～7日であり、二代目團十郎は江戸の本屋須原屋清二郎から真名本『曾我物語』の噂話（5月19日）や画家英一蝶の作品についての感想（5月21日）、俳人水間沾徳の点帖に句を添えることが依頼されたこと（5月24日）、目黒の別荘で妻翠扇と子供達とホトギスの句を読むこと（6月4日）、蚊帳の内で俳人田中千梅と和椎とともに一夜俳諧を読むことなどについて書かれている。これらの日記記録から、歌舞伎役者と江戸の文人たちの日常での関わり方が具体的に見えてきた。

『貞佐点俳諧帖』『指南車の』百韻は享保13（1728）年のもので、その調査は分担研究者稲葉有祐が主導的に行い、研究代表者ビュールクは協力者として参加した。その百韻のうち、発句から25句目までの註解は稲葉有祐、荻原大地、小林俊輝、ビュールク共著「貞佐点「指南車の」百韻註解（一）」として『演劇研究』47号に発表し、さらに参加した人物に関する調査の結果として「佳風追善百韻連句会参加者一覧」も掲載した。「指南車の」百韻は享保13（1728）年12月14日、俳人豊島佳風（有紀堂）追善百韻連句会で読まれたものであり、連衆には、歌舞伎役者二代目市川團十郎（三升）や二代目中村七三郎（少長）、狂言作者の村瀬源四郎（五舟）、二代目中村清三郎（藤橋）、江田弥市（富百）、中村座の木戸番もしくは表役の里郷、大通十八の筆頭で一説に助六のモデルとされる大口屋次（治）兵衛（暁雨）などパトロンが並んだ。読んだ句には助六や道成寺など演目の当時の演出や役者評判記の内容を仄めかすような内容の句もあり、歌舞伎と俳諧の世界の密接な関係をさらに明確に示した。

シンポジウム「江戸歌舞伎と俳諧 ―その連関・越境の可能性を探る―」は俳文学会東京研究例会 11月例会として行い、「役者を詠む/役者が詠む―元禄・享保期の展開」（稲葉有祐）、「二代目市川團十郎の俳諧趣味と仕事」（ビュールク・トーヴェ）、「役割番付における俳諧―狂言作者の作劇法をめぐる―」（古川諒太）、「三代目歌川豊国画『俳家書画狂題』一考察」（仲三枝子）、「文久三年刊『俳家俳優 索交評判記』をめぐる」（伊藤善隆）といった元禄期から幕末期までに及ぶ研究発表を通して、歌舞伎は俳諧の中でどのように反映されたのか、俳諧活動は歌舞伎役者のためにどのような役に立っていたのか、歌舞伎の宣伝に関する出版物では俳諧の影響はどのように見られるのかについて議論を深めた。

以上の3点は本研究の2023年度の主な成果である。今後、さらに二代目團十郎の日記にみられる歌舞伎の関係者と江戸の文人・俳人の具体的な関わり方を通して、江戸の文芸園のあり方を明らかにする。

公募研究
3

GHQ占領期における地域演劇の実証的研究——九州地区を中心に

研究代表者：小川史（横浜創英大学こども教育学部教授）

研究分担者：須川渡（福岡女学院大学人文学部准教授）、畑中小百合（大阪大学非常勤講師）

【研究目的】

本研究の目的は、敗戦直後に九州地区で行われた演劇、とりわけ演劇を職業としない市民による演劇の性格を明らかにすることである。研究は、九州地区劇団占領期GHQ検閲台本（ダイザー・コレクション）の分析を通して行う。

【研究成果の概要】

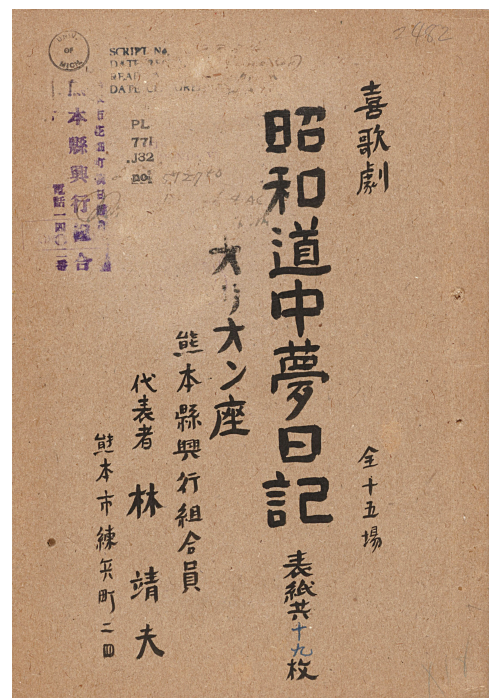
今年度はダイザー・コレクションのなかから、台本29点のデジタル化を行なった。また、コレクションのジャンル別・県別それぞれの割合を導き出し、そこから、敗戦直後の九州演劇全体の概観を試みた。その上で、各研究分担者の専門に応じ、以下の通り調査を進めた。

素人演劇・職場演劇・組合演劇については、台本に記載された劇団名や作者などの情報を、演劇専門誌（『九州演劇』『演劇文化』『演劇界』『テアトロ』など）や関係者の著作（小台三四郎『ここにほんとうの空を』九州文学社、1966年）に含まれる情報と照合し、各劇団の性格を可能な限り特定する作業を行なった。その結果、福岡県では、福岡花月劇団、創作座、協同座、協同劇団、劇研炭郷座、青春座、ともだち座、劇研ともだち座、若松鷗座、おでん座、長崎県では、かもめ座演劇研究会、ピニオン座について、劇団の性格を理解する上で有用な情報を得ることができた。その上で、これらの劇団が申請した検閲台本の内容をまとめ、各劇団の活動を立体的に把握できるようにした。検閲台本の内容と劇団の情報との照合により、占領期九州地区の演劇活動の実態解明が進んだ。

熊本県の劇団では、劇団オリオン座に焦点をあて、その活動の解明を進めた。劇団オリオン座は1946年に地元の弁護士・林靖夫を中心に宝塚少女歌劇を意識して創設され、1951年頃に解散した。彼らは、戦後に東宝やアーニーパイル劇場などで活動した日本舞踊家の花柳壽二郎の指導を乞うていて、演目の中にも花柳が製作を担当した作品がある（『お染久松二重走』）。また、作品の特徴として、新憲法普及や配給制度、戦後民主主義的イデオロギーを反映したものが多く、創作者のあいだで積極的に時事ネタとして取り入れる傾向があったと考えられる（『昭和道中夢日記』）。オリオン座は熊本

県外でも積極的に巡業公演を行っているが、彼らはしばしば本家の宝塚歌劇を装うことがあった。1949年の松山観光大博覧会においては、「宝塚歌劇」として出演した記録が残っており、多くの観客を呼び込むために有名劇団の名前を借りた宣伝を行っていたと考えられる。

大衆演劇ジャンルについては、その膨大な量の台本を確認する作業を少しずつ進めている。戦後まもなく九州を中心に活動していた大衆演劇の劇団や団体は、今では詳細不明なものも多いが、そのうちのいくつかは、現在も九州地方を拠点として活躍している劇団に関係する可能性があることがわかってきた。伝統的に口立てを基本とする大衆演劇において、検閲のために作成された台本の存在は貴重であると同時に、実際の上演との関連について慎重に考える必要がある。次年度以降は、そうした台本に焦点をあて、当時の九州地方の大衆演劇の状況にできる限り迫りたい。



『昭和道中夢日記』[GHQ02482]

作 林靖夫、振付 中島茂香。1948年6月製作

Showa Dochu Yume Nikki

Hayashi Yasuo (playwright), Nakajima Shigeka (choreographer). Produced in June 1948

栗原重一旧蔵楽譜を中心とした楽士・楽団研究 ——昭和初期の演劇・映画と音楽

研究代表者：中野正昭（淑徳大学人文学部教授）

研究分担者：白井史人（慶應義塾大学商学部准教授）、毛利眞人（音楽評論家）、山上揚平（東京大学教養学部附属教養教育高度化機構特任講師）、小島広之（東京大学大学院総合文化研究科博士課程）

【研究目的】

栗原重一（1897-1983）は昭和初期にエノケン楽団、松竹キネマ演芸部、さらにトーキー初期のPCL映画製作所などで活躍した音楽家である。本研究はその旧蔵楽譜の一部である「エノケン楽団・栗原重一旧蔵楽譜（約1000点）」の調査・分析を行う。2022年度までに実施した楽譜資料の基礎調査の成果を踏まえ、同時代の文献資料や、関連する楽譜コレクションの調査を組み合わせ研究を進める。また栗原がともに活動した榎本健一（1904-1970）およびその周辺の楽士・楽団の活動実態の実証的研究を通し、演劇、音楽、映画を横断する興行や作品生成の過程を解明することを目指す。

【研究成果の概要】

○関連資料群の調査

本研究課題は音楽史的な楽譜研究をもとにしたながら、演奏という行為の主体である楽士・楽団の実態、さらにはそれらが実際に演奏を行った演劇・映画という総合芸術・娯楽作品における音楽の役割を広く歴史的に研究することを目的としたものである。旧蔵楽譜の基礎調査は前年度に一区切りさせ、目録の作成を行ったので、本年度は資料の精査・再調査を行うとともに、これまでの研究成果を用いた楽士・楽団および演劇・映画研究を積極的に進めた。なかでも2024年は栗原重一旧蔵楽譜の大半をしめるエノケン楽団を主宰した喜劇人・榎本健一の生誕120年にあたるため、エノケン楽団とエノケン劇団（ピエルブリヤント）を中心に所蔵機関の調査および脚本・プログラム等関連資料の調査・収集を集中的に行った。この結果、第1回公演を含むエノケン劇団初期の栗原重一の活動が従来の「指揮」だけでなく「編曲」「選曲」など作品ごとに多様なクレジットが

されていること、脚本では音楽の指示がほぼなく、栗原に多くが一任されていたことがわかった。楽団における栗原の仕事の多様さ、現在と異なる昭和期ミュージカル・レビュー作品生成過程の独自さや複雑さを、資料から跡付けることができた。

○公開研究会を含む主な研究成果

主な研究成果として、2024年3月に公開研究会「音楽家・栗原重一とエノケン喜劇——エノケン生誕120年昭和期ミュージカル・レビュー再考——」（発表者：毛利眞人、中野正昭、コメンテーター：京谷啓徳）を対面・オンラインで開催した。この他の関連研究成果として毛利眞人『幻のレコード 検閲と発禁の「昭和」』（講談社、2023）、中野正昭が日本語編を担当した『林博秋全集』（石婉舜編、国立台湾文学館、2023）、白井史人他編『ベートーヴェンと大衆文化 受容のプリズム』（春秋社、2024）などがある。いずれの成果も本研究課題が目的とする演劇、音楽、映画等を横断する複層的な興行や作品生成の過程の解明を目的とするものとなっている。



「ピエルブリヤント」松竹専属第1回公演プログラム
“Pierbriant” 1st performance program,
exclusively for Shochiku



同プログラムでの栗原重一のクレジット
Credit to Kurihara Shigekazu in the program



公開研究会「音楽家・栗原重一とエノケン喜劇——エノケン生誕120年 昭和期ミュージカル・レビュー再考——」チラシ

Flyer for the public study meeting
“Musician Kurihara Shigekazu and Enoken Comedy: Reconsidering Musical Revues of the Showa Era on the 120th Anniversary of Enoken's Birth”

公募研究

5

常磐津節正本板元坂川屋の出版活動

研究代表者：竹内有一（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター教授）

研究分担者：鈴木英一（早稲田大学演劇博物館招聘研究員）、常岡亮（常磐津協会理事）、阿部さとみ（武蔵野音楽大学非常勤講師）、前島美保（国立音楽大学准教授）、重藤暁（江戸川大学非常勤講師）、小西志保（京都市立芸術大学共同研究員）

【研究目的】

坂川屋は、1860年に常磐津正本の板株を伊賀屋から継承し、1987年頃まで正本（稽古本）を刷り立てた板元である。この坂川屋が旧蔵し演劇博物館に寄贈された板木群について、当研究チームは2020年度から調査研究を進めてきた。2023年度の目的は、刷物・挿絵など正本板元としては特殊な板木の概況を明らかにすることと、「早稲田大学文化資源データベース」に板木データを組み込むための目録作成である。

【研究成果の概要】

（1）刷物・挿絵などの板木の概況について

明治期に入ると、新刊の常磐津正本の表紙・見返しに、色刷りの挿絵がしばしば加えられるようになる。木板印刷に陰りが見え始めた時期に、ようやく錦絵の如き色刷りを活用するに至ったのは、浄瑠璃本特有の出板事情があったとはいえ皮肉なことではある。演劇博物館に寄贈された坂川屋旧蔵板木には、このような色刷り用の板木が約90点あることが今年度の調査で判明した。その大半は、正本の挿絵として、あるいは催事等

の刷物の挿絵として彫られたものであるとみられる。前者については現存本との比較によって名題の特定を進めた。後者については現存本が少ないため内容未詳の板木が多い。色刷り板木は、墨による汚損を嫌ってか、包み紙が付加するものが多かった。包み紙には、明治後期から昭和初期頃と覚しい紙問屋・板木屋に関わる書込みや捺印があり、関連分野への貴重な資料ともなるだろう。

（2）「早稲田大学文化資源データベース」において板木の書誌情報を公開するための目録作成

板木両面の概要、側面・小口の書込み等について、撮影画像を再点検しながら作成し、板木総数が940点であることを確認した。両面とも未彫りの板もある。本文の板木は名題ごと順不同で仕分けされ、題簽・奥付用の小さな板木はそれとは別に集約されている。これは1990年代に坂川屋から仮保管場所（岩槻市内、のち国立市内）へ、そこから演劇博物館へ収納された際の仕分けの状態を概ね保持しており、当時の予備調査による41個の箱番号も文化資源データベースに掲載する予定である。



図1 「釣女」刷物の板木。着物柄（朱色）、人物の影・霞（色未詳）が描かれる。[29888-939]（箱番号41-10）の表面。

Fig. 1 Woodblock for Tsurionna print, depicting a kimono pattern (vermilion) and the shadow/haze of a human figure (color unclear).



図2 「釣女」刷物の板木。釣竿を持つ男と女（黒色）、着物柄・角木瓜紋・釣竿（緑色）が描かれる。[29888-939]（箱番号41-10）の裏面。

Fig. 2 Woodblock for Tsurionna print, depicting a man and woman with fishing rod (black) and a kimono pattern/square crest/fishing rod (green).



図3 図1・2の板木に、もう1枚の板木両面[29888-940]を加えた計4面を刷り上げると、このような挿絵になったと考えられる。この挿絵は、催事の番組用に彫られたものだが、本図のように稽古本の表紙に転用された。その際、「新曲 釣女」の四文字は、稽古本用板木[29888-917]の一部を刷って組み合わせたい。竹内有一所蔵。

Fig. 3 This is an illustration thought to result from printing with a total of four woodblock faces (Figures 1 and 2, as well as both faces of woodblock [29888-940]). The illustration was engraved for an event program and then reused for the cover of a practice book, as shown in this figure. At that time, the four characters for Shinkyoku Tsurionna were apparently added by printing part of the rehearsal script woodblock. From the collection of Takeuchi Yuichi.

奨励研究

本拠点では2020年度より演劇博物館の若手研究者を中心に今後の本拠点の共同研究の基礎調査を行う「奨励研究」を開始しました。2023年度も6件の研究課題が採択され、多彩な研究が行われました。

2023年度の研究課題としては、①「歌舞伎の「解説」の歴史と変遷——観客に供せられたメディア」(渡邊麻里)、②「演劇博物館所蔵落語・講談関連資料の調査・研究——田邊孝治旧蔵資料を中心に」(赤井紀美)、③「日英の女性劇作家・劇評家たち——16世紀中頃から21世紀まで」(石渕理恵子)、④「太田省吾関連資料研究——2023年度早稲田大学演劇博物館特別展に向けて」(金潤貞)、

⑤「大和屋竺旧蔵資料の調査研究」(川崎佳哉)、⑥「撮影所システム衰退期におけるプログラム・ピクチャーの実態研究(鳩飼未緒)の6件が採択され、学内外の研究者等と協力しながら、様々な角度から演劇博物館所蔵資料の調査・考証が進められた。④の成果は演劇博物館の特別展「太田省吾 生成する言葉と沈黙」に結実した。

拠点間連携事業

本拠点では演劇博物館の特別展「太田省吾 生成する言葉と沈黙」の開催にあたって、文部科学省より同じく共同利用・共同研究拠点としての認定を受けている京都芸術大学舞台芸術研究センター「舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点」と連携し、様々な関連イベントを実施しました。その記録は成果報告冊子にまとめて公開を予定しています。

シンポジウム「言葉と沈黙のありか——太田省吾の仕事をめぐる」

演出家・劇作家の太田省吾(1939-2007年)は、演劇のあり方に問いを投げかけ、「沈黙劇」をはじめとする、独自の表現スタイルを切り拓いた。彼の手がけた作品には、言葉と沈黙のありかをめぐる独自の感受性と思索を見出すことができる。1970年代・1980年代の劇団転形劇場の主宰者としての活動、そして1990年代・2000年代の公立劇場(藤沢市湘南台文化センター市民シアター)や大学(近畿大学、京都造形芸術大学・現：京都芸術大学)での仕事には、現在の芸術創造とそれを取り巻く環境を見つめ直す上で、多くの示唆が含まれている。

そこで、シンポジウム「言葉と沈黙のありか——太田省吾の仕事をめぐる」(2023年12月7日/於：早稲田大学小野記念講堂)では、太田省吾と創造活動とともにされた演劇人、また同時代を伴走した演劇批評家をお招きし、太田の仕事を取り返し、その今日的意義について考えた。

登壇者(五十音順)は、安藤朋子氏(アクター・Theater Company ARICA)、鴻英良氏(演劇批評家)、新里直之氏(演劇研究者・京都芸術大学舞台芸術研究センター研究職員)、花光潤子氏(プロデューサー・NPO法人魁文舎理事長)、森山直人氏(演劇批評家・多摩美術大学演劇舞踊デザイン学科教授)。

第一部の基調発表では、演劇批評家として同時代を伴走された鴻氏、アクターとして数々の創作現場を太田省吾とともにされた安藤氏、そして湘南台文化センター市民シアターで太田芸術監督のもと、多彩な自主事業を担当されたプロ

デューサーの花光氏をお招きしてお話をうかがった。

続く第二部のディスカッションでは、京都造形芸術大学で太田のご同僚だった演劇批評家の森山氏、また、今回の特別展における共同企画者の一人であり、演劇研究者である新里氏にも加わっていただき、第一部の発表内容を踏まえて、太田省吾の遺した足跡、また舞台芸術の可能性や課題について、討議を行った。

特別展「太田省吾 生成する言葉と沈黙」は、太田の創作における言葉と沈黙をめぐる感受性、さらに人間存在とそれを取り巻く世界に対する思索を、上演関連資料や演劇



シンポジウム登壇者

左より：森山直人氏、花光潤子氏、鴻英良氏、安藤朋子氏、新里直之氏
Symposium speakers
(from left) Moriyama Naoto, Hanamitsu Junko, Otori Hidenaga,
Ando Tomoko, Niisato Naoyuki

論を紹介しつつ再考する試みとなっている。本シンポジウムは、そうした試みからより視野を広げて、太田省吾の仕

事を創造の場や演劇批評の観点からも見つめ直す機会となった。

太田省吾演出『小町風伝』『水の駅』上映&トーク

「沈黙劇」と呼ばれるユニークな演劇作品の記録映像とゲストを招いたトークを通して演出家・劇作家としての太田省吾の仕事を振り返る企画として、太田演出の『小町風伝』と『水の駅』の上映&トークイベント（2023年12月20日・21日／於：京都芸術大学映像ホール）を開催した。

トークゲストには20日は佐伯順子氏（同志社大学大学院教授、オンライン登壇）、21日は相模友士郎氏（演出家）をお招きした。

トークを通じて『小町風伝』については古い、セクシュア

リティ、能との関わりなどのテーマが取り上げられた。さらに、ジェンダー論的な視点から、現代社会が抱えている問題に対する応答として作品が内包する可能性が論じられた。『水の駅』については、作品の持つ遅さと沈黙、また「見る」ことや「触れる」ことなど、太田が抱えていた問題意識を軸にトークが行われた。参加者の方々から受けた質問および意見からも話題が広がり、俳優の身体性や観客の観劇体験など両作品から見出されるテーマについても議論され、太田作品の豊かさが浮かび上がるイベントとなった。

研究会「太田省吾の仕事、その現在性／歴史性」

「今、なぜ太田省吾か?」「演劇史において太田省吾はどのような存在なのか?」という大きな問いについて議論する試みとして、非公開のオンライン研究会「太田省吾の仕事、その現在性／歴史性」（2023年11月15日）を開催した。

出席者は、岩城京子氏（演劇パフォーマンス学研究者・アントワープ大学文学部芸術学科准教授）、新里直之氏、金潤貞（演劇研究者・早稲田大学演劇博物館助教）。

岩城氏は、現代演劇を貫く特徴を分析した上で、日本現代演劇の「稗史」を紡ぐという視点から、今日における太田作品の意義を示した。世界演劇史の流れから読み直した太田省吾のドラマトゥルギーについて論じ、さらに、災害の時代とも言いえる現代に対して太田作品が応答するあり方について、近年学界にて提唱された「弱いドラマトゥルギー」（weak dramaturgy）や「スロー・ドラマトゥルギー」（slow

dramaturgy）を用いた読解の可能性を提示した。

新里氏は、これまでの太田省吾への批評・研究的な応答を検討した上で、1970年代という消費社会を背景に登場した太田省吾のドラマトゥルギーについて語り、「述語の演劇」という創作ヴィジョンを追い求めた太田の仕事を、現代演劇の文脈に位置付けた。

金氏は、韓国演劇界における太田省吾演劇の受容をテーマに、韓国戦争（朝鮮戦争）以降の日韓演劇交流史を踏まえ、韓国の演出家による太田作品を事例に彼の「沈黙劇」がいかに理解されてきたのかについて述べた。同時に、韓国現代演劇界で表現された沈黙性についても触れた。

三者によるディスカッションでは様々な観点から、太田省吾の今日的な意義が提示され、有意義な研究会となった。

キム・スギ氏インタビュー

太田省吾は多数の国際プロジェクトに取り組み、韓国俳優と協働した発表作品には『更地（韓国版）』がある。本作は2000年に韓国ソウルの文芸会館小劇場で上演され、それ以降、日本でも再演が行われた。すべての上演で「女」役を演じたのは、キム・スギ氏であり、2024年1月22日に、氏とのオンライン・インタビュー（聞き手：金潤貞、新里直之）を実施した。

キム・スギ氏は現在国立芸術大学の韓国芸術総合学校演劇院演技科で教授を務めており、近年、大学における教育の一環として、『水の駅』を上演した。本作は、氏の最初の演出作品である。

今回のインタビューでは、まず、太田省吾との出会いと

『更地（韓国版）』に出演することになったきっかけや舞台化の過程についてお話しいただいた。西欧演劇を中心に教育を受けていた氏の演劇観・演技観を踏まえ、太田省吾の作品、そこに込められている演劇観を氏がどのように理解されたのかご説明いただいた。また、近年上演された『水の駅』の創作過程の具体的な事例を通して、教育者としての氏の哲学をいかに学生たちと共有できたのかについて聞くことができた。

速いスピードで変化しつつある今日の社会において、太田省吾作品が俳優、また観客にとってどのような問題提起を含むのかについて貴重なお話を伺う機会となった。

拠点主催事業

コロナ禍の演劇に関する共同研究事業

本拠点では、2020年度からのコロナ禍の演劇の動向を調査してきた「特別テーマ研究」の成果を発展させるとともに、広く国内外の演劇、芸術、社会の動向のなかで新たな議論につなげる取り組みを継続しました。

シンポジウム

「コロナ禍の3年間—演劇・ミュージアム・社会」

本拠点では、2020年度から2021年度にかけてコロナ禍の国内外の演劇の動向を調査した「特別テーマ研究」の成果を発展させ、2022年度からこれを広く演劇、芸術、社会の動向のなかでの新たな議論につなげる取り組みを進めている。

昨年度には首都圏の劇場関係者を招いたシンポジウム「劇場・博物館における舞台芸術資料アーカイブの課題と展望」や、日韓両国のポストコロナの時代における演劇の場としての「劇場」のあり方について議論する日韓国際オンラインシンポジウム「ポストコロナ時代の劇場——未来の劇場のために」、およびコロナ禍により需要が高まった演劇の映像配信をテーマにした日英国際オンラインシンポジウム「演劇と映像配信の未来を考える——英国ナショナル・シアターと松竹の事例から」を開催した。

そして迎えた今年度には、2023年5月に新型コロナウイルスの感染症法上の位置付けが「5類」に引き下げられた。感染者数の全数把握の中止、マスク着用の緩和など、私たちの生活は着々とポストコロナの時代に移行しつつある。そこで本拠点では、こうした実情と前年度までの研究成果を踏まえ、約3年に及んだパンデミックと国内外の演劇を中心とする芸術、そして社会について、演劇のミュージアムという立場から総括するシンポジウム「コロナ禍の3年間——演劇・ミュージアム・社会」（2023年7月21日／於：早稲田大学小野記念講堂）を開催した。

登壇者は、板倉聖哲氏（東京大学東洋文化研究所教授）、伊達なつめ氏（演劇ジャーナリスト）、後藤隆基氏（立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター助教）、児玉竜一（早稲田大学文学学術院教授、同演劇博物館館長）。

まず後藤氏には、2021年度の春季企画展「Lost in Pandemic——失われた演劇と新たな表現の地平」を企画

した前助教として、演劇博物館のコロナ禍における取り組みについて主にご説明いただいた。また、演劇ジャーナリストとして活躍される伊達氏には、日々国内外の演劇界の状況について情報を収集し続け、ウェブサイト「世界ステジカレンダー with コロナ」においてその情報を発信し続けたお立場から、コロナ禍の3年間を振り返っていただいた。そして板倉氏には、演劇に隣接する美術史家としてのお立場から、美術館、博物館といったミュージアムの動向について、コロナ禍によって及ぼされた影響に焦点を当てて広く語っていただいた。

演劇博物館は演劇資料の収集・展示・保存・研究にあたるミュージアムとして長らく活動してきた。本シンポジウムは、演劇の実践の場における状況にも目配せをしつつ、コロナ禍を通じて浮かび上がってきた、ミュージアムたる演劇博物館の事業における課題や展望を共有し、演劇、ひいては文化全体がコロナ禍を超えたポストコロナの時代に未永く発展していくためにいったい何ができるのか、いったい何が必要なのかを様々な角度から議論する機会となった。

「新型コロナウイルスと演劇年表」

コロナ禍の出来事を歴史として記録し、未来へ継承する試みとして演劇博物館2021年度春季企画展「Lost in Pandemic——失われた演劇と新たな表現の地平」図録および『エンパクブック』118号に掲載した「新型コロナウイルスと演劇年表」の作成を今年度も継続し、2023年12月末までの情報をまとめて完成させた。同年表は「新型コロナウイルスと演劇年表データベース」として早稲田大学文化資源データベースで公開している。また、完全版の年表はシンポジウム「コロナ禍の3年間——演劇・ミュージアム・社会」の採録とともに、今年度末に刊行する成果報告冊子「新型コロナウイルスと演劇・ミュージアム・社会」に収録される予定である。

くずし字判読支援事業

本拠点では2016年度以来、TOPPAN株式会社（旧・凸版印刷株式会社）との共同で「くずし字判読支援事業」を行っています。

演劇博物館は江戸時代の貴重な浄瑠璃丸本の充実したコレクションを誇るが、これらの資料は漢字をくずした「く

ずし字」の中でも独特な書体で描かれているために判読が困難である。しかし資料自体は古典芸能研究においてきわ

めて有用であるため、それらの資料を若手や海外の研究者の利用にも広く供するという目的のもと、本事業では「くずし字OCR」の構築作業を行ってきた。

今年度も、過年度の事業で蓄積されたくずし字字形データとTOPPAN株式会社の開発によるオンライン翻刻システムを組み合わせた教育・研究活動の推進を図り、カリフォルニア大学ロサンゼルス校、お茶の水女子大学と提携したオンラインでの国際翻刻ワークショップを開催した。ワークショップは歌舞伎台本「東海道四谷怪談」を対象資料と

し、「くずし字OCR」の利活用可能性を開拓するとともに、オンラインツールを用いた日本の古典演劇資料の共同翻刻を土台とした遠隔での国際的学術交流を実現した。

また今年度は、「くずし字OCR」を活用した総合的古典籍データベースを拡充するため、過年度に作成した浄瑠璃丸本「仮名手本忠臣蔵」「義経千本桜」「菅原伝授手習鑑」の字形データセットの改修・統合作業を実施した。リニューアルした字形データセットは本拠点ウェブサイトおよび早稲田大学文化資源データベースに公開予定である。

海外の大学研究機関との連携事業

本拠点では新型コロナウイルスの感染拡大以降もオンラインツールを活用しつつ海外の機関との研究交流を積極的に行っており、今年度も充実した成果をあげました。

日英対談

「歌舞伎とシェイクスピア上演の過去・現在・未来」

日本で最初にシェイクスピアの全作品を翻訳した坪内逍遙により設立された演劇博物館では、シェイクスピア研究の世界的拠点であるシェイクスピア研究所を擁するイギリスのバーミンガム大学と研究協力体制を築いてきた。今年度本拠点ではシェイクスピア研究所教授のティファニー・スターン氏をお招きして日英対談「歌舞伎とシェイクスピア上演の過去・現在・未来」を実施した（2023年11月1日、オンライン、非公開）。対談の相手は早稲田大学文学学術院教授・演劇博物館長で歌舞伎を専門とする児玉竜一が務めた。

本対談は上演という「残らないもの」にいかにかアプローチし再現しようかという点にフォーカスし、お互いの研究に資する情報交換を行うことで将来的な日英演劇比較研究の基盤作りを目指すために企画され、シェイクスピア劇と歌舞伎の上演における共通点や差異も踏まえながら、両国を代表する「古典」と呼ばれる演劇上演における過去・現在・未来をつなぐ議論が展開された。対談の採録は本拠点のウエ

ブサイトにて公開する予定である。

日仏演劇国際シンポジウム「病とその表象」

演劇博物館では2005年度からフランスのストラスブール大学と提携関係にあり、定期的に日仏演劇国際シンポジウムを開いてきた。今年度は2016年以来、通算7回目のシンポジウムとして「病とその表象」（2024年1月12・13日／於：早稲田大学26号館多目的講義室、主催：スーパーグローバル大学創成支援事業早稲田大学国際日本学拠点、共催：早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点、ストラスブール大学）を開催した。

本シンポジウムは、近年のコロナ禍、それに伴う社会活動および芸術活動の中断によって問い直すことを迫られた「病」と「健康」をテーマに開催された。早稲田およびストラスブールの両大学を中心とした異なる専門分野の研究者が、それぞれの視点・視座と手法を交差させることで、日本とフランスの社会と文化、歴史について再考する機会となった。

演劇・映像資料の利活用を図る事業

本拠点では、演劇博物館の貴重かつ多彩な所蔵資料を保全しつつ広く一般に供するため、資料のデジタル化とデータベース化を積極的に進めています。

戦前期映画雑誌のデジタル化

演劇博物館には、発行巻号数が少ないマイナーなものも含め、大正・昭和初期を中心とした戦前期の映画雑誌が多数収蔵されている。戦前に製作・公開された映画作品のフィルムは散逸してしまったものが多く、同時代の日本における映画産業の状況について知ることができる資料は限ら

れているため、戦前期の雑誌は重要な日本映画研究の資料で学術的な需要も高いが、その多くに劣化が見られ、実物を閲覧に供することは難しくなっている。そこで今年度本拠点では、戦前期映画雑誌のデジタル化に取り組んだ。

デジタル化したタイトルは、『活動雑誌』『活動之世界』『キネマ画報』など96点におよぶ。



『活動之世界』第5巻第3号 (1923年) [ネ12-149-5.3]
Katsudo no Sekai Vol. 5 No. 3 (1923)



『鍋かぶり日親』(牧野省三・沼田紅緑、1922年) ポスター
[NRK46357-16]
Poster for Nabe Kaburi Nisshin
(Makino Shozo/Numata Koroku, 1922)



『変化難』雄猫の衣裳デザイン画・雄猫化粧図 [00206-014]
Hengebina tomcat costume design and makeup design

デジタル化は本拠点が所有する高精細スキャナで行い、表紙やグラビア部分も鮮明なカラーで複製されている。デジタル化した戦前期映画雑誌は早稲田大学文化資源データベースで公開予定である。

過年度共同研究成果のデータベース化

本拠点では、「テーマ研究」や「公募研究」といった共同研究事業を通じてデジタル化・目録化された資料を早稲田大学文化資源データベースにて公開することで、演劇・映像資料の基礎研究のためのアーカイブを拡充し続けている。

演劇博物館の設立者である坪内逍遙は執筆上演のために集めた資料や下絵、装置図等の貼込帖を作成し、同館に寄贈した。昨年度の「長生新浦島」に続き、今年度は「変化難」(へんげびな)の貼込帖のデータを「坪内逍遙作上演劇材料貼込帖データベース」の一部として公開した。このデータベースは、2014・2015年度演劇映像学連携研究拠点における公募研究、2016～2019年度同テーマ研究課題

「坪内逍遙・坪内士行資料の基礎的調査研究」(研究代表者：濱口久仁子)の調査研究成果の一部である。横長大判の貼込帖に収められた様々な資料は逍遙の創作の跡をたどるうえで、また上演の記録として貴重であり、今後も本データベースを拡充していく。

また今年度は、日蓮主義の布教を目的として1920年代に牧野教育映画と共同で数本の宗教映画を製作した独立プロダクション、立正活映の関連資料で構成される「立正活映データベース」も公開した。このデータベースは2018年度演劇映像学連携研究拠点公募研究課題「マルチマテリアルを基礎とした立正活映作品の復元」(研究代表者：上田学)の研究成果である。本資料はこれまで前景化されてこなかった日本映画と宗教の関係、とりわけ日本近代史に大きな役割を果たした日蓮主義と映画界の結びつきを示す貴重なものであり、その公開は映画史の先行研究ではほとんど取り上げられてこなかった立正活映に関する研究を大きく進展させるはずである。



Mission and Vision

Leader of the Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts

Kodama Ryuichi

The Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts, operated by the Theatre Museum, has been active since 2009 as a Joint Usage/Research Center, by the Ministry of Education (MEXT), Culture, Sports, Science and Technology. The unique feature of this center is its collaboration with the Theatre Museum that has a collection of more than one million materials, to contribute to joint research on valuable unreleased/undisclosed materials which have not been adequately put to academic use.

Through four types of collaborative research, the Center promotes multifaceted, advanced research for diverse researchers, in fields outside theater and film studies as well. First, Principal Research involves joint research projects on themes and materials proposed by the Center. Selected Research comprises joint research topics addressing the Theatre Museum's valuable materials, with research topics being publicly recruited. Encouragement Research focuses on young researchers affiliated with the Theatre Museum, who carry out basic surveys as the foundation for future joint research. Finally, Organized Projects include joint research led by the Center in collaboration with other research institutions and corporations in Japan and abroad.

In this academic year, eight joint research teams were selected to continue Principal Research and Selected Research from the previous academic year. Each research team disseminated the results of its research widely in Japan and abroad through the publication of a report booklet, the holding of a symposium and the publication of a database of the subject material.

Under encouragement research projects, six young researchers conducted new research projects, making use of the Theatre Museum collection for surveys and examination from various perspectives: the history and transformations of "guide" in *kabuki*, survey research on materials related to *rakugo* and *kodan* storytelling, Japanese and British female playwrights and theater critics, Ota Shogo, Yamatoya Atsushi, and programs and pictures in the late Japanese

studio system era. Organized Projects included (1) the state of performing arts after the COVID-19 pandemic, (2) close collaboration with corporations and research institutions in Japan and abroad, and (3) exploration of the potential of digital resources and technology. In relation to (1), we held the "3 Years of COVID-19: Theater, Museum, Society" symposium in July, as an overview of the three years of the pandemic from a theater "museum" perspective, concerning the arts, in particular Japanese and international theater, and society. Regarding (2), We are continuing joint project of deciphering *Kuzushiji* with TOPPAN Inc. since AY 2016. As well as using the *Kuzushiji* OCR constructed so far for educational purposes, the character form dataset produced in previous academic years was corrected and collated for greater convenience. Moreover, a special exhibition on "Emerging Words and Silence: Ōta Shōgo and His Process of Creation" was held to great acclaim, along with various collateral events; this was a collaborative project of the Joint Usage/Research Center in cooperation with the Kyoto Performing Arts and Interdisciplinary Research Center for Performing Arts, Kyoto University of Arts. Further, international research exchange was promoted through collaboration with the University of Birmingham and University of Strasbourg. Regarding (3), We continue to work towards the publication of digital databases to preserve and share valuable materials.

We intend to continue making use of the abundant research materials and digital technologies possessed by the Theatre Museum to serve as a hub for joint research in collaboration with research institutions in Japan and overseas. In April 2023, the director of the Waseda University Theatre Museum, the parent organisation of the Center, changed from the 8th director, Okamuro Minako, to the 9th director, Kodama Ryuichi. Therefore, the leader of the Centre has also changed to Kodama. We appreciate your ongoing support and cooperation.

○ Principal research

The principal research involves a joint research project on the theme proposed by the Center, which researchers were encouraged to participate in. The titles and affiliations of the project members shown below are as of the start of the fiscal year.

Principal research

1

A Study on the Collection of the Autographed Manuscripts of Betsuyaku Minoru

Principal Researcher: Umeyama Itsuki (Associate Professor, Department of Performing Arts, Faculty of Literature, Arts and Cultural Studies, Kindai University)

Collaborative Researchers: Okamuro Minako (Professor, Faculty of Letters, Arts, and Sciences, Waseda University), Miyamoto Keiko (Part-time Lecturer, Shirayuri University)

Research Objectives

The purpose of this study is to examine Betsuyaku's style as a playwright and character representations in his works, through a survey of the material donated by Betsuyaku's family and the documents concerning his work, which are maintained by the Theatre Museum. The Principal Research project of the same title adopted in AY2020 investigated documents related to Betsuyaku's early works. Research from AY2022 onward has outlined the shifts in his style from the 1970s and worked to clarify how his interest in literary works, such as those of Miyazawa Kenji and Fukazawa Shichiro, nursery rhymes, and ancient poetry, was reflected in his writing.

In addition to extending the existing survey work, research in AY2023 addressed Betsuyaku's screenplays, examining actors' scripts among the donated material to analyze the works and consider the type of film and TV works Betsuyaku created and how they relate to his theater scripts.

Summary of Research

First, continuing research included a survey of unsorted material and an examination of the influence of literary works, nursery rhymes, and folksongs on Betsuyaku's work since the 1970s. The first survey of unsorted material, conducted mainly by Miyamoto Keiko, organized the handwritten manuscript of *The Smile of Dr. Maximilian*, a play that was scattered at the time of its donation.

Second, Okamuro Minako submitted a paper to *Studies in Dramatic Art* that highlighted the influence of Fukazawa Shichiro's novel *Narayama Bushiko* on the play *Aabukutatta, Niitatta*. The paper intended to examine this influence within the play through the keywords of "poverty," "death by starvation," and "snow." In his play

The Soyosoyo-zoku no Hanran, Betsuyaku conceived of the silent Soyosoyo people, who continue to whisper in society's ear by starving to death. Okamuro points out that this idea came to fruition in *Aabukutatta Niitatta* later and shows that *Narayama Bushiko* had a particular influence on this process in its depiction of the power of song and the character Orin, who was shut away within snow and silence as having actively accepted her death amid the poverty of her village, she is abandoned in the mountains.

This paper indicates that *Narayama Bushiko* serves as a means of continuity between the abstract plays of the 1970s and the later so-called *petit-bourgeois* works. Although they appear disconnected at first glance, these works share a consistent view of "poverty" as simultaneously created and concealed by society.

Research on screenplays addressed the TV show *Star Ranch* (NHK General, 1981) and the film *Coup d'État* (directed by Yoshida Kiju, 1973) and compared the filmed version with the scripts. It became clear that although *Star Ranch* was based on the novel of the same name by Shono Eiji, Betsuyaku chose to focus on the war and postwar society when writing the script, demonstrating a clear continuity with the characteristics of his theater plays. Further, it was found that Betsuyaku's unique lines highlight the differences in realism between the theater and filmed media, providing a valuable perspective for future analysis of Betsuyaku's film and TV works based on media theory. *Coup d'État* is to be analyzed in the future with reference to donated materials concerning Kita Ikki, the protagonist.

As noted here, this study made use of donated materials concerning Betsuyaku to bring to light new findings in Betsuyaku studies. The outcomes can aid future research.

Research on the Kurabayashi Seiichiro materials

Principal Researcher: Goto Ryuki (Associate Professor, The Edogawa Rampo Memorial Center for Popular Culture Studies, Rikkyo University)

Collaborative Researchers: Kamiyama Akira (Emeritus Professor, Meiji University), Yoneya Naoko (Cultural policy and arts management advisor)

Research Objectives

Shortly after Japan's defeat in World War II, Kurabayashi Seiichiro (1912-2000) joined the Haiyu-za Gekidan Theater Company in 1946. He founded the Haiyu-za Theater in 1956 and was appointed CEO in 1981. In 1965, he was instrumental in establishing the Japan's first unified body of entertainment performers, *Geidankyo*, the Japan Council of Performers Rights & Performing Arts Organizations. This organization significantly influenced the protection of performers' rights, support for cultural activities, and policy advocacy in the performing arts. With the view to establish a foundation for basic research on postwar theater, this study aims to reassess Kurabayashi's contributions as a theatrical producer by examining and interpreting his previously unorganized and undisclosed materials.

Summary of Research

We continued the cataloging process by sorting, classifying, and recording the materials on the basis of their distinct characteristics with Research collaborators, Fujiya Keiko and Sakuma Satoshi.

Before its donation to the Theatre Museum, the Kurabayashi Seiichiro Fonds, consisting of a total of 6,523 items at the time of its pre-donation assessment, were initially entrusted to *Geidankyo* by Kurabayashi's family. Of these, the Theatre Museum accepted 3,004 items, including 387 books, 835 magazines, and 1,782 museum artifacts; it excluded 3,519 books and magazines because of duplications and various other reasons.

Since last year, we have been meticulously sifting through this diverse range of unsorted materials, focusing on themes that Kurabayashi was particularly interested in, including entertainment tax, cultural policy, labor theater, and history of entertainment. This process involved identifying documents that potentially facilitates detailed historical research on these topics. However, the sheer volume of the materials made the selection process challenging, prompting me to concentrate on essential tasks like cataloging as I pursued these more targeted historical analyses.

Based on this, this academic year, in conjunction with the Grant-in-Aid for Scientific Research (C),

("Fundamental Research on Postwar *Shingeki* Based on Investigation and Research of Kurabayashi Seiichiro Archives" (Principal Investigator: Goto Ryuki, Grant Number: 21K00199) which the project leader has been carrying out since 2021, we have attempted to organise and investigate materials from the former collection of Kurabayashi. This project now extends to organizing and examining materials related to Kurabayashi's extensive diaries, consisting of 79 volumes penned from June 1947 to March 2000, as part of a wider endeavor that also encompasses materials beyond the diaries.

We, particularly, engaged in the transcription of diaries written during the Occupation period between 1947 and 1952. This also involved selecting materials from the same period that could complement the descriptions in the diaries. As part of the Grant-in-Aid for Scientific Research project, we held a public symposium at Rikkyo University on February 10, 2024, entitled "The Hidden Reality of *Shingeki* Theater Under the Occupation - Reading the Diaries of Kurabayashi Seiichiro" Our esteemed speakers, including me, were Kamiyama Akira (collaborative researcher), Kodama Ryuichi (collaborative researcher). The symposium focused on using Kurabayashi's diaries as a lens to explore postwar *shingeki* as entertainment, as well as the economic aspects of the genre. It questioned the conventional view of new drama history, including.

As this fiscal year marks the conclusion of the aforementioned grant project, we plan to shift our focus to a more encompassing study of the entire corpus of materials collected from Kurabayashi, including his diaries. This new phase aims to fully uncover and explore Kurabayashi's body of work and its significance within the context of postwar *shingeki* dynamics. Last year, we started to undertake the organization and historical analysis of materials related to *shingeki* performances in China and diaries associated with the Mizuho Gekidan Theater Company. Unfortunately, we failed to proceed with the same kind of in-depth investigation and verification this year. Therefore, these topics are slated for future consideration. This plan involves not only continuing our current research but also incorporating the discovery and examination of additional materials.

Research and Study Toward the Utilization of Film-related Materials Centered on Theater Flyers

Principal Researcher: Okada Hidenori (Chief Curator, National Film Archive of Japan)

Collaborative Researchers: Kamiya Makiko (Part-time Lecturer, Musashino Art University), Shibata Kotaro (JSPS Research Fellow PD)

Research Objectives

This study was launched to continue and develop the AY2020-2021 Selected Research survey of urban Tokyo movie theaters. From AY2022, theater flyers in Tokyo and Kansai started being examined with the aim of comparing film screenings in East and West Japan while clarifying the status of film screenings in the silent film era and writing them accurately into film history.

Summary of Research

In this academic year, the cataloging of theater flyers (93 from Tokyo and 137 from Osaka) continued, which had started in AY2022, and attention was given to historical investigation, including related materials. Each researcher also chose a theme related to the AY2020-2021 Selected Research topics for survey and examination. Shibata Kotaro focused on materials related to the Nara Obana Theater, giving a presentation titled "Movie Theater Management and Exhibition in Regional Cities: Focusing on Material from the Taisho-era Nara Obana Theater" (Japan Society of Image Arts and Sciences 49th Annual Convention, June 11, 2023, Meiji Gakuin University). Moreover, Kamiya Makiko drew inspiration from the analysis of theater flyers and extant film, publishing a paper on "The Intertextuality of Sadism and Masochism in the Popular Culture in the Late Meiji to Early Taisho Period: Goro Masamune Koshiden (1915) as a Starting Point" (*EIZOGAKU: Japanese Journal of Image Arts and Sciences*, No. 110, JSIAS, July 2023).

Okada Hidenori participated in planning for the All-Japan Non-film Materials Archive Conference 2024 (January 26, 2024, online), giving a presentation on

initiatives for the preservation and release of film-related materials at the National Film Archive Japan (NFAJ). On December 11, 2023, a screening and symposium entitled "Reviving the Sounds of *Biwa* Film" was organized at the Waseda University Ono Auditorium based on the team's years of research (with support from the Musicological Society of Japan as an AY2023 music-related event). Highlighting the large number of theater flyers and the practice of *biwa* film music found therein, the event examined how the practices of religion, film, and music intertwined in Taisho-era silent film screenings. Part 1 of the symposium began with presentations by Kamiya on "Considering the 1920 Film *Nichiren Shonin Tatsu no Kuchi Honan*: Pilgrimages and Representations of 'Miracles'" from the film history perspective and Ueda Manabu (Kobe Gakuin University) on "Nichirenist Propaganda Films and Rissho Katsuei Materials," which examined the relationship between religion and history in the 1920s. Next, Komoda Haruko (Musashino Academia Musicae) discussed "Taisho-era *Biwa* Culture" from a musicological perspective, and Shibata explored the interaction between Taisho-era *biwa* music trends and film screenings in "*Biwa* Film Scripts and Film *Biwa* Organizations."

In Part 2, a screening of *Nichiren Shonin Tatsu no Kuchi Honan* (1920, NFAJ) was organized, based on a historical *biwa*-ballad script owned by Komatsu Hiroshi (Waseda University), with the aid of *satsuma biwa* player Kawashima Nobuko, film narrator Kataoka Ichiro, and Japanese traditional percussionist Katada Kisayo. After the screening, the three performers participated in a discussion on the potential and issues of "reconstructed" screenings of films with *biwa* music.

○ Selected research

The selected research consists of joint research projects derived from the reviewed proposals, which aim to promote the effective use of the Theatre Museum's collections. The Center provides a venue and materials for these joint research projects. The titles and affiliations of the project members shown below are as of the start of the fiscal year.

Selected research

1

Dance during the Wartime and the Postwar Period, Seen Through the Eguchi Hiroshi Materials

Principal Researcher: Miyagawa Mariko (Assistant Professor, Department of Body Expression and Cinematic Arts, College of Contemporary Psychology, Rikkyo University)

Collaborative Researchers: Kitahara Mariko (Adjunct Researcher, Theatre Museum, Waseda University), Lamolière, Maëva (Doctoral Program, Department of Dance, the University of Paris 8)

Research Objectives

The objectives of this study are to survey the “Eguchi Hiroshi Holdings” (280 items, mainly photographs and newspaper clippings related to dance) and to describe the Japanese dance scene throughout the politically tumultuous Showa era. Eguchi Hiroshi (1903-1982) was a dance critic for half a century, from the prewar through postwar periods. The investigation of these materials is expected to provide a new perspective on 20th-century Japanese dance history, which has so far focused on renowned dancers.

Summary of Research

Eguchi Hiroshi is notable for his continuous, comprehensive observations of and writings on dance as a newspaper dance critic, and for his expertise ranging from Western to Japanese dance. It proved difficult, however, to trace the activities of young dancers influenced by new postwar dance trends, in particular postmodern dance and the advent of *ankoku butoh*, through the Eguchi Hiroshi Holdings. To compensate for this, a closed research seminar was held on August 25 of this academic year with the participation of Nakamura Tomoko, who worked in modern dance production in the 1960s. Along with producing performances by Atsugi Bonjin, Wakamatsu Miki, and Kasai Akira, she organized three dance exhibitions in the late 1960s. The seminar discussion revealed that the “Atsugi Bonjin Dance Recital with Five Choreographers” held in 1964 included the work of not only Takahashi Hyoh, Wakamatsu Miki, Yokoi Shigeru, and Yura Kazuo but also Hijikata Tatsumi, shedding light on the earliest period of *ankoku butoh* and on exchange among dancers. This seminar was held with the cooperation of Morishita Takashi from the Hijikata Tatsumi Archive of the Keio University Art Center.

In addition, this second anniversary of the project was marked by a symposium held on November 22 at

the National Dance Center (Centre national de la danse) of France entitled “Modern Dance in Showa-era Japan as Seen Through the Eguchi Hiroshi Holdings” (« À la recherche de la danse moderne au Japon: Scènes de danse de l'ère Shōwa (1926-1989) »). Its purposes were to compare Japan and France, where much research has been conducted on wartime and postwar dancers, and to broaden historical understanding, which has been biased toward the modern dance pioneers such as Ishii Baku, Eguchi Takaya, and Miya Misako, as well as toward postwar *ankoku butoh*, in France.

Japanese presenters at the symposium included Miyagawa Mariko, Kitahara Mariko, and the collaborative researcher Hirai Kanoko, and discussants from the University of Paris 8 included Maëva Lamolière along with Professor Isabelle Launay and Associate Professor Sylviane Pagès. Kitahara began by introducing the Eguchi Hiroshi Holdings, and then presented her research on “Youbu (Western dance)” in Japan from its beginnings to its establishment (« Ce monde de la danse chaotique sans ordre, sans organisation » sous les yeux du critique dans les années 1930). Miyagawa followed with a presentation on dance in Japan during World War II (“Regards sur les danses au Japon pendant la Seconde Guerre mondiale : de la collection d'Eguchi Hiroshi”). Hirai's presentation covered experimental dance in the 1960s and 1970s (“La revue de critique de danse : *Nijusseiki Buyô* et le développement de ses activités”). With nearly 30 participants, a lively discussion took place on the topic of dance in Japan and France, in particular the reception of modern dance.

Further, the presentations given at this symposium, representing the outcomes of two years of research, were bound as a pamphlet entitled “Modern Dance in Showa-era Japan as Seen Through the Eguchi Hiroshi Holdings” and distributed to symposium participants and to libraries and other relevant institutions in both countries.

Literary Circles of the Mid-Edo Period, Through Diaries of Kabuki Actors

Principal Researcher: Björk, Tove Johanna (Professor, Saitama University Graduate School of Humanities and Social Sciences)

Collaborative Researchers: Inaba Yusuke (Associate Professor, Wako University Faculty of Liberal Arts), Hioki Takayuki (Associate Professor, School of Information and Communication, Meiji University)

Research Objectives

Based on the “Hakuen Diary of Ichikawa Danjuro II,” this study aims to (1) examine the provenance of the Hakuen Diary and (2) investigate the literary circles of the mid-Edo period, focusing on *kabuki* performers. The Hakuen Diary, constitutes an important document as a record of the daily lives of *kabuki* performers in the mid-Edo period as well as the literary sphere in which they operated. With the diary as a starting point, this study’s intent is to clarify the Kyoho-era *kabuki* actors’ environment and their connections to *haikai* poets and other literati.

Summary of Research

The first of the three main research results of this academic year was the continued annotation and commentary of the diaries. The second investigation involved the *Teisa Ten Haikaijo* (university of Tokyo Library Shachiku Archive), which details the relationships between the *kabuki* actors and *haikai* poets who appear in the diaries; the research team provided commentary on the first 25 poems in the “Shinansha no” (“Commanding chariot”) 100-poem sequence and investigated the identities behind the pen-names. The third result was a symposium exploring the associations and liminality of Edo *kabuki* and *haikai* in circles and printed material.

The principal investigator Björk, continued to write annotations of the diaries of Ichikawa Danjuro II, publishing Part 6 in the *Saitama Daigaku (Kyoyo Gakubu) Kiyo* [Saitama University Faculty of Liberal Arts Review] Vol. 59 No. 1, and Part 7 likewise in Vol. 59 No. 2. These sections cover May 19-29 and June 1-7, 1734, and they mention gossip with the Edo bookseller Suharaya Seijiro about the *manabon* text of the *Tale of the Soga Brothers* (19th day 5th month); impressions of the work of the artist Hanabusa Itcho (21st day 5th month), requests to add poems to the collection of the *haikai* poet Mizuma Sentoku (24th day 5th month); writing poems about the lesser cuckoo (4th day 6th month); and spending all night writing *haikai* poems under a mosquito net with the poets Tanaka Senbai and Washii (7th day 6th month). These diary entries enable us to envisage specific everyday interactions among *kabuki* actors and Edo literary figures.

Co-investigator Inaba Yusuke led the study of the “Shinansha no” 100-poem sequence in the *Teisa Ten*

Haikaijo, which dates from 1728. Commentary on the first 25 poems was published in *Studies in Dramatic Art* Vol. 47 as “Commentary on the ‘Shinansha no’ 100-poem sequence recorded by Teisa (1),” with Inaba Yusuke, Ogihara Daichi, Kobayashi Toshiki, and Tove Björk as coauthors; the results of an investigation into the poems’ authors were included as “A List of Participants in the Kafu Memorial 100-poem Sequence Group.” The “Shinansha no” sequence was written on 14th day of the 12th month, 1728, by the Toshima Kafu (the *haikai* poet also known as Yukido) 100-Poem Memorial Sequence Group; the authors included the *kabuki* actors Ichikawa Danjuro II (Sansho) and Nakamura Shichisaburo II (Shocho), the playwrights Murase Genshiro (Gosen), Nakamura Seizaburo II (Tokyo), and Eda Yaichi (Fuhyaku), Rigo the doorman of the Nakamura-za theater, and patrons such as Oguchiya Jibei (Gyo’u), ranked as a big spender in Edo and thought by some to be the model for *Sukeroku* performed by Danjuro II. Some of the poems hint at contemporary productions and actors’ critiques of plays such as *Sukeroku* and *Dojoji*, further clarifying the intimate connections between *kabuki* and the world of *haikai*.

The symposium “Edo *Kabuki* and *Haikai*: Exploring Their Associations and Border-Crossing Potentials” included presentations covering the Genroku through Bakumatsu periods. The symposium furthered discussion on how *kabuki* was reflected in *haikai*, how *kabuki* actors put *haikai* to use, and how the influence of *haikai* appeared in published advertising for *kabuki*. Presentations included “Reading actors/actors writing: Development in the Genroku and Kyoho periods” (Inaba Yusuke), “Ichikawa Danjuro II’s *haikai*: hobby and work” (Tove Björk), “*Haikai* in role assignments: Concerning *kyogen* playwrights’ writing methods” (Furukawa Ryota), “Consideration of Utagawa Toyokuni III’s print ‘Haika shoga kyodai’” (Naka Mieko), and “Concerning the ‘Haika Haiyu Tanko Hyobanki’ Published in 1863” (Ito Yoshitaka).

Mentioned above are the three main outcomes of this study for AY2023. Future plans include continuing the clarification of Edo literary circles through the specific relationships between *kabuki* actors, Edo literati and poets, and so on, as depicted in the diaries of Danjuro II.

Empirical Research on Regional Theatre Under the GHQ (SCAP) Occupation: Focusing on the Kyushu Area

Principal Researcher: Ogawa Chikashi (Professor, Faculty of Childhood Education, Yokohama Soei University)

Collaborative Researchers: Sugawa Wataru (Associate Professor, Faculty of Humanities, Fukuoka Jo Gakuin University), Hatanaka Sayuri (Part-time Lecturer, Osaka University)

Research Objectives

The objective of this study is to clarify the characteristics of the theater produced immediately after World War II in the Kyushu area, particularly theater produced by citizens who were not professional performers. This is accomplished through an analysis of the Dizer Collection (scripts from Kyushu-area theatrical productions censored by the SCAP [GHQ]).

Summary of Research

This academic year, 29 scripts from the Dizer Collection were digitized. The percentages of Collection content by genre and prefecture were also calculated toward a general overview of theater in Kyushu immediately after World War II. Research on these topics proceeded in accordance with each assigned researcher's area of expertise as follows.

Regarding amateur theater, workplace theater, and union theater, information written on the scripts, such as company names and authors, was referenced against information from theatrical magazines (*Kyushu Engeki*, *Engeki Bunka*, *Engekikai*, *Teatro*, etc.) and Kodai Sanshiro's book *Koko ni honto no sora wo* (Kyushu Bungakusha, 1966) to pinpoint the characteristics of each company as far as possible. This resulted in useful information on the characteristics of the Fukuoka Kagetsu Gekidan, Sosaku-za, Kyodo-za, Kyodo Gekidan, Gekiken Tango-za, Seishun-za, Tomodachi-za, Gekiken Tomodachi-za, Wakamatsu Kamome-za, and Oden-za companies in Fukuoka and the Kamome-za Engeki Kenkyukai and Pinion-za in Nagasaki. Moreover, the content of the censored scripts each company had submitted was organized so as to provide a three-dimensional understanding of their productions; cross-referencing the script contents and the company information helped to clarify the actual status of theatrical activities in occupation-era Kyushu.

With regard to theater companies in Kumamoto, research focused on elucidating the activities of the Orion-za company. Founded in 1946 by the local lawyer Hayashi Yasuo and others and inspired by the Takarazuka Revue, this company was disbanded around 1951. The company sought the guidance of Japanese classical dancer Hanayagi Jujiro, who performed at Toho and the Ernie Pyle Theater after World War II; Hanayagi was also involved with production for some of their performances (*O-Some Hisamatsu nijuso*). Many of their works also reflected issues such as the popularization of the new Constitution, the rationing system, and postwar democratic ideology, suggesting that the authors were actively inclined to address hot-button issues of the time (*Showa Dochu Yume Nikki*). The Orion-za toured actively outside Kumamoto Prefecture as well, frequently pretending to be the actual Takarazuka Revue. Records show that they performed as the "Takarazuka Revue" at the 1949 Matsuyama Tourism Expo; they may have been using the name of a famous company as advertising to increase their audience.

Regarding popular theater genres, review work on the vast quantity of scripts is proceeding gradually. Detailed information is currently not available for many of the popular theater companies and organizations active mainly in Kyushu immediately after World War II; however, the research team has discovered that some may be connected to companies still active in and around Kyushu today. In popular theater, traditionally based on semi-improvised *kuchidate*, the scripts created for censorship purposes are valuable resources; at the same time, their relation to the actual performance content must be approached with caution. The study plans to focus on these scripts next year and thereafter to acquire as much information as possible on the status of popular theater in the Kyushu region at the time.

Research on Musicians and Musical Bands through Kurihara's Musical Score Collection: Music for Stage and Cinema during the Early Showa Era

Principal Researcher: Nakano Masaaki (Professor, College of Humanities, Shukutoku University)

Collaborative Researchers: Shirai Fumito (Associate Professor, Faculty of Business and Commerce, Keio University), Mori Masato (Independent Researcher), Yamakami Yohei (Project Lecturer, Komaba Organization for Educational Excellence, The University of Tokyo), Kojima Hiroyuki (Doctoral Program, Graduate School of Arts and Sciences, The University of Tokyo)

Research Objectives

Kurihara Shigekazu (1897-1983) was a musician active in the early Showa period (1920s and 30s), including the Enoken Orchestra, the Shochiku Kinema Entertainment Club, and, in the early days of talkies, the P.C.L. (Photo Chemical Laboratory) Film Studio. This research investigates and analyzes a part of a collection of old music scores entitled "A Collection of Old Music Scores of Kurihara Shigekazu of the Enoken Orchestra" (approximately 1000 items). On the basis of the results of a basic survey of musical scores conducted up to 2022, the research will involve combining literary materials from the period with related collections of musical scores. This research also aims to elucidate the process of production and creation of works spanning theater, music, and film by conducting empirical research on activities of Enomoto Ken'ichi (1904-1970), with whom Kurihara worked, and other musicians and orchestras around him.

Summary of Research

○ Investigation of related materials

By adopting a research topic based on the musical score research from a music historical perspective, this research aims to conduct a wide-ranging examination on the musicians and musical bands who played a main role as performers, as well as the role of music in the comprehensive works of art and entertainment (e.g., plays and cinema) in which they performed. A basic survey of the old musical scores was completed in the previous year, and a catalog was created. This year, in addition to scrutinizing and re-examining the materials, research has actively progressed on musicians, musical bands, theater, and film using the results of previous research. Particularly, 2024 marks the 120th anniversary of the birth of comedian Enomoto Ken'ichi, who presided over the Enoken Orchestra, which holds

most of the old music scores of Kurihara Shigekazu. Thus, the research focused on the Enoken Orchestra and the Enoken Theater Company (Pierre Brillante), concentrating on researching institutions with scores in their collections, as well as researching and collecting related materials like scripts and programs. Kurihara Shigekazu, including the first performance, was credited in a range of different ways in the early days of the Enoken Theater Company, including not only his traditional role of "conducting" but also "arranging" and "music selection," and that there were almost no musical instructions in the scripts, with much left to Kurihara's discretion. Examination of the materials highlighted the diversity of Kurihara's work with musical bands, as well as tracing the unique and complex aspects of the process of producing musical revue works in the early to mid-20th century, which differed from the present.

○ main research results including public research meetings

One significant result of this research has been a public research meeting "Musician Kurihara Shigekazu and Enoken Comedy: Reconsidering Musical Revues of the Showa Era on the 120th Anniversary of Enoken's Birth" (presenters: Mori Masato, Nakano Masaaki; commentator: Kyotani Yoshinori), held both in-person and online in March 2024. Other related research results include *Phantom Records: Censorship and Prohibitions during the Showa Era* (Kodansha, 2023) by Mori Masato; *The Complete Works of Lin Tuan-chiu* (edited by Shih Wan-shun, National Museum of Taiwan Literature, 2023), edited by Nakano Masaaki in Japanese, *Beethoven and Popular Culture: The Prism of Acceptance* (Shunjusha, 2024), edited by Shirai Fumito et al. These research results further aim to shed light on Kurihara's multi-layered processes of performance and production that span diverse domains including theater, music, and film.

Publishing Activities of the Sakagawaya, Publisher of the Original Tokiwazu-bushi

Principal Researcher: Takeuchi Yuuichi (Professor, Research Institute for Japanese Traditional Music, Kyoto City University of Arts)

Collaborative Researchers: Suzuki Eiichi (Adjunct Researcher, Theatre Museum, Waseda University), Tsuneoka Ryou (Director, Tokiwazu Association), Abe Satomi (Part-time Lecturer, Musashino Academia Musicae), Maeshima Miho (Associate Professor, Kunitachi College of Music), Shigefuji Gyoo (Part-time Lecturer, Edogawa University), Konishi Shiho (Collaborative Researcher, Kyoto City University of Arts)

Research Objectives

In 1860, the Sakagawaya inherited woodblock prints of the Tokiwazu from its original printer, the Igaya, for reprinting; it continued to print original copies (practice books) from woodcuts up through 1987 or so. From AY2020 on, the research team has surveyed the woodblock prints held by the Sakagawaya and subsequently donated to the Theatre Museum. Objectives for AY2023 include clarifying the particular status of these woodblocks as the originals of prints, illustrations, and so on, as well as creating a catalog enabling the integration of the woodblock data into the Waseda University Cultural Resource Database.

Summary of Research

(1) Status of woodblocks of prints, illustrations, etc.

By the Meiji era, new editions of the original Tokiwazu-bushi print often bore colored illustrations on their covers and endpapers. The adoption of *nishiki-e* style color printing just as woodblock printing began to decline was ironically timed, even given the publishing issues unique to *yoruri* books. This academic year's survey has brought to light about 90 color-print woodblocks among the Sakagawaya collection donated to the Theatre Museum. Most of them appear to be illustrations for the original copies or for materials for events and so on. Regarding the former, the team

has worked to identify the titles through comparison with existing copies; the contents of many of the latter remain unclear because of the scarcity of extant copies. Perhaps to avoid ink stains, many of the color-print woodblocks are wrapped in paper. The wrappings bear notes and seals from paper wholesalers and woodblock sellers thought to date from the late Meiji to the early Showa eras, providing valuable material for related fields.

(2) Creating a catalog to publish woodblock bibliographical information through the Waseda University Cultural Resource Database

The team has confirmed that there are a total of 940 woodblocks, reviewing photographic images with overviews of both faces of each block, notes on the sides and margins, etc. Some blocks are not engraved on either face. Blocks bearing text have been sorted in random order by title, with a separate collection for the small woodblocks used for title tags and colophons. This process more or less retains the sorting which took place in the 1990s, when the materials were moved from the Sakagawaya to temporary storage (in Iwatsuki City and then Kunitachi City) and then stored at the Theatre Museum. The 41 box numbers affixed at the time of the initial survey are to be listed in the Cultural Resource Database as well.

Encouragement Research Project

In 2020, we embarked on “encouragement research,” wherein we conduct collaborative research with young scholars at the Theatre Museum. In 2023, six projects were adopted, and a variety of research was conducted.

The research agenda for the fiscal year 2023 includes several key projects: (1) The History and Evolution of ‘Guide’ in *Kabuki* – Media Offered to the Audience (Watanabe Mari), (2) A Survey and Research of *Rakugo* and *Kōdan*-Related Materials in the Theatre Museum’s Collection: Focusing on the Tanabe Koji Collection (Akai Kimi), (3) Female Playwrights and Critics in Japan and England from the Mid-16th Century to the 21st Century (Ishibuchi Rieko), (4) Research on Materials Related to Ōta Shōgo—Towards the 2023 Special Exhibition at Theatre Museum, Waseda

University (Kim Yun-jeong), (5) Research on the Atsushi Yamatoya Collection (Kawasaki Keiya), and (6) A Study on the Reality of Program Pictures during the Decline of the Studio System (Hatokai Mio). These projects were selected and will be pursued in cooperation with researchers within and outside the institution, exploring various aspects of the Theatre Museum’s collections. The outcomes of Project (4) culminated in the special exhibition at the Theatre Museum titled “Emerging Words and Silence: Ōta Shōgo and His Process of Creation.”

Collaborative Projects

For the special exhibition “Emerging Words and Silence: Ōta Shōgo and His Process of Creation” at the Theater Museum, we collaborated with the Center for Cross-Disciplinary & Practical Research on Creation and Perception of the Performing Arts at the Kyoto University of the Arts. Like our center, this center has been accredited as a Joint Usage/Research Center by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology. Together, we organized several events related to the exhibition. The records of these events have been compiled into a booklet, which is now scheduled for publication.

Symposium: “The Place of Words and Silence: Ōta Shōgo and His Works”

Ōta Shōgo (1939-2007) was a director and playwright known for challenging conventional theatrical forms and pioneering various unique styles of expression, including the “theater of silence.” His works reveal a distinctive sensitivity and contemplation of the place of words and silence. Ōta’s tenure as the leader of the Theatre of Transformation (*Tenkei gekijō*) in the 1970s and 1980s, as well as his subsequent work at a public theater—the Shonandai Cultural Center Civic Theatre in Fujisawa City—and at Kindai University and the Kyoto University of Art and Design (now known as the Kyoto University of the Arts) in the 1990s and 2000s provide valuable insights into the evolution of artistic creation and its context.

On December 7, 2023, a symposium was held at Waseda University’s Ono Memorial Auditorium. At this symposium, theater practitioners and critics who worked alongside or parallelly with Ōta gathered to reflect on the contemporary relevance of his contributions.

The speakers included Andō Tomoko (actor, Theater Company ARICA), Ōtori Hidenaga (theater critic), Niisato

Naoyuki (theater researcher, Kyoto University of Arts), Hanamitsu Junko (producer, NPO Kaibunsha), and Moriyama Naoto (theater critic, Tama Art University).

The first session included keynote speeches from Ōtori, who has observed Ōta’s contemporary stages, Andō, a former member of *Tenkei gekijō*, and Hanamitsu, a producer for various initiatives at the Shōnandai Cultural Center Civic Theatre.

The second session welcomed Moriyama, a critic and a former colleague of Ōta at the Kyoto University of Art and Design, and Niisato, a theater researcher and co-organizer of the special exhibition. Based on the presentations in the first session, they discussed Ōta’s legacy, future prospects, and challenges for the performing arts.

The special exhibition explored Ōta’s creative approach by re-examining his use of words and silence, and his broader reflections on human existence. It showcased Ōta’s theory of theater and various theatrical materials to present his views on creation. In addition, the symposium examined Ōta’s works from creative and critical perspectives.

Screening and Talk Event of Ōta Shōgo’s Productions: *The Tale of Komachi Told by the Wind* and *The Water Station*

A screening and talk event was held at the Kyoto University of the Arts Film Hall on December 20 and 21, 2023, to revisit the contributions of Ōta Shōgo as a director

and playwright. The event featured two plays, *Komachi fuden* [The Tale of Komachi Told by the Wind] and *Mizu no eki* [The Water Station] that are part of Ōta’s unique

theatrical style known as the “theater of silence.”

The discussions welcomed distinguished guests, including Saeki Junko, a professor at Doshisha University, who joined the discussion online on December 20, 2023, and Sagami Yūjirō, a director, who attended on December 21, 2023.

The talk session on *Komachi fuden* [The Tale of Komachi Told by the Wind] covered several themes such as aging, sexuality, and the connection between the work and Noh stage. The discussion also explored the potential of the play

to respond to contemporary social issues from a gender theory perspective.

The talk session on *Mizu no eki* [The Water Station] focused on the themes of slowness, silence, “seeing,” and “touching” in Ōta’s work. The audience’s questions and comments expanded the discussion to include themes found in both plays, such as the actor’s body and the experience of watching plays as an audience member. Overall, the event showcased the richness of Ōta’s works.

Study Session on “The Works of Ōta Shōgo: Their Contemporary Relevance and Historical Significance”

A private online study session was held on November 15, 2023, to discuss the contemporary relevance and historical significance of the works of Ōta Shōgo. The session addressed important questions such as the importance of focusing on Ōta today and what his works mean to the history of theater.

The participants were Iwaki Kyoko, a lecturer in Theatre and Performance Studies in the Department of Literature at the University of Antwerp, Niisato Naoyuki, and Kim Yun-jeong, a theater researcher and assistant professor at the Theater Museum.

Iwaki analyzed the defining traits of contemporary theater and highlighted the importance of Ōta’s works in the present context from the perspective of creating a “historical fiction” of contemporary Japanese theater. She discussed Ōta’s dramaturgy in the context of global theater history and introduced the concepts of “weak dramaturgy” and “slow dramaturgy” as possible ways to understand Ōta’s response to the contemporary “era of disasters.”

Niisato reviewed critical and academic responses to Ōta and discussed how his dramaturgy emerged in the context of the consumer society of the 1970s. Ōta’s works, which pursued a creative vision described as “theater of the predicate,” was positioned within the context of contemporary theater.

Kim examined the reception of Ōta’s theater in the South Korean theater scene, building on the history of theatrical exchanges between Japan and South Korea after the Korean War. She used South Korean directors’ productions of Ōta’s works as examples to discuss critical understanding and interpretations of Ōta’s “theater of silence.” Additionally, she discussed the expression of silence in contemporary South Korean theater.

The discussion among the three participants offered various perspectives on the contemporary significance of Ōta’s work, making it a meaningful and insightful study session.

Reflecting on Korea and Japan Collaboration Project *Sarachi*, and *Mizu no Eki* of the Korea National University of Arts

Ōta Shōgo collaborated internationally on several projects, including the Korean version of *Sarachi* [The Vacant Lot]. The play premiered at the Seoul Art Center’s Small Theater in South Korea in 2000 and has since been restaged in Japan. Kim Soo-gi has played the role of the “woman” in all productions. On January 22, 2024, Kim Yun-jeong and Niisato Naoyuki conducted an online interview with her.

Kim is currently a professor at the School of Drama at the Korea National University of Arts. Recently she directed *Mizu no Eki* as part of her teaching activities, which marked her first foray into directing.

In the interview, Kim shared insights into her initial

encounter with Ōta and the journey of her involvement in the Korean version of *Sarachi*, including the staging process. Drawing from her predominantly Western theater-based training, she elaborated on her interpretation and understanding of Ōta’s theatrical and acting philosophies as found in his works. Additionally, she discussed her recent experience of directing *Mizu no eki* and how she had used this practical experience to share her educational philosophy with her students.

The conversation provided a distinctive perspective on the types of questions raised by Ōta’s pieces to performers and the audience in the swiftly changing society of today.

Project Organized by the Center

Joint Research Projects on Theater During the Coronavirus Pandemic

To develop the results of the urgent theme research projects that have been investigating the directions in theater during the COVID-19 pandemic since AY2020, we have continued work on initiatives that will lead to new discussions on a wide range of domestic and overseas trends in theater, arts, and society.

Symposium “Three Years of COVID-19: Theater, Museums, and Society”

Based on the results of the urgent theme research from AY2020 to AY2021 that investigated domestic and overseas theater trends during the COVID-19 pandemic, we launched new discussions from AY2022, broadly relating these results to the movements in theater, arts, and society.

Symposia held in the last academic year included “Challenges and Prospects for Archiving Materials Related to The Performing Arts in Theaters and Museums,” with metropolitan area theater staff as guests, the Japan-Korea International Online Symposium “Theater in the Post-COVID Era: For the Future of Theater,” discussing the theater as a space for drama in the post-pandemic era in both countries, and the Japan-UK International Online Symposium “The Future of Theatre and Online Streaming/Screenings in Cinemas: From the Cases of National Theatre Live in the UK and Shochiku in Japan,” on the topic of the online streaming and screening of plays in light of increased demand during the pandemic.

During this academic year, in May, COVID-19 was officially downgraded to a “Class 5” infectious disease. With total cases no longer counted and mask requirements becoming less strict, our lifestyles are shifting to the new post-pandemic era. Based on these circumstances and the research outcomes of the last academic year, the Center held a symposium entitled “Three Years of COVID-19: Theater, Museums, and Society” (July 21, 2023, Ono Auditorium, Waseda University). The symposium was a general examination of the arts, particularly Japanese and international theater, and society over the three years of the pandemic from the perspective of a theater museum.

Speakers included Itakura Masaaki (Professor, Institute for Advanced Studies on Asia, University of Tokyo), Date Natsume (theater journalist), Goto Ryuki (Assistant Professor, Edogawa Rampo Memorial Center for Popular Culture Studies, Rikkyo University), and Kodama Ryuichi (Professor, Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda

University, and Director of the Theatre Museum).

Goto, as the planner of the AY2021 spring exhibition “Lost in Pandemic: Theatre Adrift and Expression’s New Horizons,” began by explaining the Theatre Museum’s pandemic-era initiatives. Next, Date reflected on the three years of the pandemic based on her experience running the website “World Theatre Calendar during COVID-19,” where she consistently collected and disseminated information on the state of theater in Japan and abroad. Itakura, as an art historian adjacent to the theatre field, gave a wide-ranging talk on museum trends, focusing on the effects of the pandemic.

The Theatre Museum has been consistently dedicated to collecting, exhibiting, conserving, and researching theater-related materials. This symposium was an opportunity to share the issues and prospects raised by the pandemic in the work of the Theatre Museum as a museum, while taking note of the circumstances to which the actual practice of theater is subjected, and to discuss from multiple viewpoints what we can do and what is needed to ensure the continued development of theater and culture as a whole in the long term, in the post-COVID era beyond the pandemic.

“Chronology of Theater and COVID-19”

This academic year we continued to work on the “Chronology of Theater and COVID-19” listed in the catalog of the Theatre Museum AY2021 spring exhibition “Lost in Pandemic: Theatre Adrift and Expression’s New Horizons” and in *Enpaku book* Vol. 118, adding in information up through the end of 2023, as a historical record conveying the events of the pandemic to the future. The Chronology can be viewed as the “Chronology of Theater and COVID-19 Database” in the Waseda University Cultural Resource Database. Its final version is to be included in the research results report “COVID-19 and Theatre, Museums, and Society” to be published at the end of this academic year, along with a record of the symposium “Three Years of COVID-19: Theatre, Museums, and Society.”

Project supporting the decipherment of *kuzushiji*

Since AY2016, the Center has been holding an “*kuzushiji reading support projects*” in conjunction with TOPPAN Inc.

The Theatre Museum has a valuable collection of Edo-era *yoruri maruhon*, which are very difficult to decipher due to their writing style, unique even among cursive *kuzushiji* writing. Because the materials themselves are extremely important and useful for research on traditional arts, this project has worked to create a “*Kuzushiji OCR*” to enable young international researchers and scholars to make wider use of these materials as well.

In this academic year, we made further progress with education and research combining the *kuzushiji* character style database accumulated by the project in previous academic years and the online transliteration system developed by TOPPAN Inc., holding an International Workshop on deciphering *kuzushiji* with the University of California, Los Angeles, and Ochanomizu University.

The workshop focused on the *kabuki* playscript *Tokaido Yotsuya Kaidan*, exploring further potential for the use of *Kuzushiji OCR* as well as achieving international academic research exchange based on joint transliteration of Japanese classical theater materials using online tools.

Additionally, We revised and integrated the character style datasets for the *yoruri maruhon* “*Kanadehon Chushingura*,” “*Yoshitsune Senbonzakura*,” and “*Sugawara Denju Tenarai Kagami*” created in previous academic years, with a view to realizing an expanded comprehensive database of classical texts using *Kuzushiji OCR*. The revised character style dataset will be released on the website of Center and the Waseda University Cultural Resource Database.

International Collaborative Projects

Before and since the outbreak of the COVID-19 pandemic, the Center has been making use of online tools for active research exchange with foreign institutions, producing ample research outcomes this academic year as well.

Japan-UK dialog

“*Kabuki and Shakespeare in Performance: Past, Present, and Future*”

The Theatre Museum (founded by Tsubouchi Shoyo, the first person to translate the complete works of Shakespeare into Japanese) has built a collaborative research relationship with the University of Birmingham in the UK and its Shakespeare Institute, a global hub for Shakespeare studies. This academic year, the Center hosted Professor Tiffany Stern of the Shakespeare Institute for a Japan-UK dialog on “*Kabuki and Shakespeare in Performance: Past, Present, and Future*” (November 1, 2023, online, closed). Professor Stern’s interlocutor was Professor Kodama Ryuichi of the Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda University, a *kabuki* scholar who is also Director of the Theatre Museum.

This dialogue was organised to focus on how we can approach and reproduce the performance that ‘do not remain’, and to exchange information that will contribute to research of each other, with the aim of laying the foundations for future comparative research on UK-Japanese theater. The discussion was held linking the past, present and future in the performance of the ‘classics’ representing both countries based on the similarities and differences between Shakespeare’s plays and *kabuki*

performances. A record of the dialog will be made available on the website of the Center.

Japan-France International Symposium on Theater “*Diseases and Their Representations*”

The Theatre Museum has been collaborating with the University of Strasbourg, France, since AY2005, holding regular Japan-France International Symposia. The seventh of these since AY2016 was “*Diseases and Their Representations*” (January 12-13, 2024, Waseda University Building #26 Lecture Hall; presented by the Top Global University Project Waseda University Global Japan Studies Project, with support from the Waseda University Theatre Museum Collaborative Research Center for Theatre and Film Arts and the University of Strasbourg).

This symposium was held on the themes of “disease” and “health,” which we have been forced to reconsider amid the recent COVID-19 pandemic and the accompanying suspension of social and artistic activity. The convergence of perspectives and methods presented by researchers in various disciplines, mainly from the University of Strasbourg and Waseda University, brought about an opportunity to rethink the societies, cultures, and histories of Japan and France.

Project to Utilize Theater- and Film-related Materials

The Center is making active progress with digitization and database creation for its valuable and diverse collection to conserve the materials while making them widely available.

Digitization of prewar film magazines

The Theatre Museum collection includes numerous film magazines from before World War II, mainly dating to the Taisho and early Showa eras, including minor publications of which only a few issues were ever published. The film stock of movies produced and released before the war was frequently scattered, meaning that few resources are available to shed light on the prewar Japanese film industry; therefore, these prewar magazines, which constitute an important resource for Japanese film studies, are in high academic demand. However, many are deteriorating and thus it is becoming difficult to make available for inspection. Therefore, this academic year, the Center worked on digitizing this collection of prewar film magazines.

Approximately 96 titles have been digitized, including *Katsudo Zasshi*, *Katsudo no Sekai*, and *Kinema Gaho*.

Digitization is done with the Center's high-definition scanner, reproducing the covers and photospreads in vivid color as well. The digitized prewar film magazines are to be made available on the Waseda University Cultural Resource Database.

Database creation through collaborative research in previous academic years

The Center continues to expand the archive for basic research on theatre- and film-related materials by making digitised and catalogued materials through joint research projects such as "Principal Research" and "Selected Research" available on the Waseda University Cultural Resources Database.

Tsubouchi Shoyo, founder of the Theatre Museum,

created scrapbooks full of various materials, sketches, prop designs, etc., for the productions of his plays, which he later donated to the Museum. Following last academic year's *Chosei Shin-Urashima*, this academic year, the *Hengebina* scrapbook data was released as part of the Database of Scrapbooks of Tsubouchi Shoyo's Play Materials. This database is a part of the research results of the "Basic Research Survey of Materials Relating to Tsubouchi Shoyo and Tsubouchi Shiko" (Selected Research AY2014-2015, Principal Research AY2016-2019, Principal Researcher: Hamaguchi Kuniko). The 60 × 110 cm scrapbooks contain various materials which are highly valuable in tracing Shoyo's creative work as well as constituting a performance record. This database is to be further expanded in the future.

Additionally, the Database of Material Related to Rissho Katsuei was released this academic year. Rissho Katsuei, an independent production studio established in the 1920s as a proselytizing arm of Nichiren Buddhism, produced several religious films jointly with Makino Educational Film Production. This database is among the research outcomes of the "Restoration of the Rissho Katsuei Films Based on Multiple Materials" (Selected Research AY2018, principal Researcher: Ueda Manabu). The value of these materials lies in the light they shed on the previously unexamined connection between Japanese cinema and religion, particularly between Nichirenism, which played a major role in modern Japanese history, and film history. Their release should provide a significant boost to research on Rissho Katsuei, which has been almost entirely overlooked in previous film history research.